

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第123集

てん じん もと
天神本第2遺跡
Tenjinmoto 2 Site

おお うち ばる
大内原遺跡
Ooutibaru Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書28

2006

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財発掘調査を平成11年度から実施しております。本書はその中の2遺跡についての発掘調査報告書です。

天神本第2遺跡は、なだらかな丘陵の端部に立地する遺跡です。縄文時代早期の石織や石器製作に伴う剥片・破片が数多く出土しており、石器製作跡と推測されます。2基検出された集石遺構とあわせて、該期の生活のあり方を知る上で貴重な情報を含んでいます。

また、隣接した谷地形に立地する大内原遺跡では、弥生時代終末～古墳時代初頭に属する竪穴住居跡や中世の土壌が検出され、大きな成果をあげることができました。

ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となれば幸いです。

なお、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 宮 園 淳 一

例 言

- 1 本書は、東九州自動車道（都農～西都賀間）建設に伴い、平成15～16年度に実施した天神本第2遺跡・大内原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団（現西日本高速道路株式会社）九州支社から委託を受けて宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
なお、日本道路公団は平成17年10月1日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社となったが、本報告書中では日本道路公団として記載する。
- 3 現地での実測及び写真等の記録は、天神本第2遺跡については吉本正典・白地浩が、大内原遺跡は白地・吉本・都成量が行ったほか、発掘作業員が補助した。出土遺物写真は、天神本第2遺跡については吉本が撮影し、大内原遺跡は白地が撮影した。
- 4 本書使用の遺物実測図の作成は、天神本第2遺跡については吉本が、大内原遺跡は白地・藤木聡が行ったほか整理作業員が補助した。
- 5 測量・空中写真・理化学的分析等は次の機関に委託した。
(天神本第2遺跡)
基準点設置 : (有) 進藤測量設計事務所
空中写真撮影 : (有) スカイサーベイ九州
(大内原遺跡)
基準点設置 : (有) エイユウ技建
空中写真撮影 : (有) スカイサーベイ九州
自然科学分析 : (株) 古環境研究所
- 6 本書で使用した周辺遺跡分布図（第1図）は、国土地理院発行の25,000分の1地形図をもとに、遺跡周辺地形図（第2図）は、日本道路公団九州支社宮崎工事事務所提供の1,000分の1測量図をもとに作成した。
- 7 本書で使用した方位は座標北（G.N.）を基本とするが、遺構実測図などの一部に磁北（M.N.）を用いた。標高は海拔絶対高である。なお、国土地標は旧平面直角座標系Ⅱに基づく。
- 8 土層断面・石材・土器の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に準拠した。
- 9 本報告書では遺構の略号は使用していないが、図面や遺物の注記には下記の略号を用いている。
SI=集石遺構 SA=堅穴住居跡 SD=土壇 SC=土坑 SE=溝状遺構
SH=小穴
- 10 挿図の縮尺は次のとおりとする。
石器（天神本第2遺跡2/3、大内原遺跡1/3） 土器（天神本第2遺跡1/3、大内原遺跡1/4）
陶磁器 1/4 集石遺構 1/30 土坑 1/20 土壇 1/20 堅穴住居跡 1/40
- 11 東九州自動車道関連遺跡の発掘調査では、基本的に認められるテフラやローム層、黒色土帯については共通の略称を用いている。ローム層は、上からML1・ML2…、黒色土帯はMB1・MB2…とする（第Ⅰ章註1文献参照）。
- 12 1号土壇から出土した墨書石の経文については、宮崎市の甲斐常興氏にご教示していただいた。
- 13 本書の執筆・編集は、第Ⅰ・Ⅱ章を吉本が、第Ⅲ章を白地が担当した。
- 14 出土遺物その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	1
	第1節 発掘調査に至る経緯	1
	第2節 調査の組織	1
	第3節 遺跡周辺の環境	2
第Ⅱ章	天神本第2遺跡の調査	4
	第1節 発掘調査・整理作業の流れ	4
	第2節 層序	6
	第3節 旧石器時代終末期の遺物	6
	1 概要	6
	2 遺物	6
	第4節 縄文時代早期の遺構と遺物	6
	1 概要	6
	2 遺構	6
	3 遺物① 一土器	10
	4 遺物② 一石器類	12
	第5節 弥生時代の遺物	19
	第6節 中世以降の遺構	19
	第7節 まとめ	20
	1 遺物集巾箇所について	20
	2 弥生土器に関して	20
第Ⅲ章	大内原遺跡の調査	27
	第1節 確認調査の概要	27
	第2節 発掘調査・整理作業の流れ	28
	第3節 基本層序	28
	第4節 弥生時代・古墳時代の遺構と遺物	30
	1 1号竪穴住居跡	30
	2 1号土坑	32
	3 遺構外出土遺物	33
	第5節 中世～近世の遺構と遺物	36
	1 概要	36
	2 1号土壌	36
	3 調査区内遺物	39
	第6節 時期不明の遺構と遺物	41
	1 1号溝状遺構	41
	2 石器	41
	3 陶磁器	41
	第7節 自然科学分析の結果	44
	1 目的	44
	2 1号土坑における放射性炭素年代測定結果	44
	3 1号土坑における樹種同定結果	44
	第8節 まとめ	46
	1 弥生時代の遺構について	46
	2 弥生時代・古墳時代の遺物について	46
	3 中世の遺構について	46
	4 中世の遺物について	46

挿図目次

第1図	天神本第2遺跡・大内原遺跡周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)	3
第2図	天神本第2遺跡・大内原遺跡の立地と周辺地形 (S=1/4,000)	4
第3図	天神本第2遺跡 遺構の分布 (S=1/400)	5
第4図	天神本第2遺跡 1号溝・2号溝埋土の堆積状況 (S=1/20)	5
第5図	天神本第2遺跡 東壁層位図 (S=1/80)	7
第6図	天神本第2遺跡 旧石器時代終末期の遺物の分布状況 (S=1/300)	8
第7図	天神本第2遺跡 後期旧石器時代終末期の遺物 (S=2/3)	8
第8図	天神本第2遺跡 集石遺構 (S=1/30)	9
第9図	天神本第2遺跡 縄文土器出土位置 (S=1/400)	11
第10図	天神本第2遺跡 縄文土器実測図 (S=1/3)	11
第11図	天神本第2遺跡 黒曜石製品・石材出土状況 (S=1/300)	13
第12図	天神本第2遺跡 黒曜石製品・石材実測図 (S=2/3)	13
第13図	天神本第2遺跡 チャートI類・II類製品・石材出土状況 (S=1/300)	14
第14図	天神本第2遺跡 チャートI類製品・石材実測図 (S=2/3)	14
第15図	天神本第2遺跡 チャートII類製品・石材実測図 (S=2/3)	15

第16図	天神本第2遺跡	チャートⅢ類製品・石材出土状況 (S=1/300)	15
第17図	天神本第2遺跡	チャートⅢ類製品・石材実測図 (S=2/3)	16
第18図	天神本第2遺跡	チャートⅣ類・Ⅴ類製品・石材出土状況 (S=1/300)	17
第19図	天神本第2遺跡	チャートⅣ類・Ⅴ類製品・石材実測図 (S=2/3)	17
第20図	天神本第2遺跡	その他の石材・製品等出土状況 (S=1/300)	18
第21図	天神本第2遺跡	その他の石材・製品等実測図 (S=2/3)	18
第22図	天神本第2遺跡	弥生土器実測図 (S=1/3)	19
第23図	大内原遺跡	確認調査トレンチ配置図 (S=1/4,000)	27
第24図	大内原遺跡	確認調査B区出土遺物実測図 (S=1/4)	28
第25図	大内原遺跡	土層実測ポイント配置図 (S=1/1,000)	29
第26図	大内原遺跡	土層断面図 (S=1/100)	29
第27図	大内原遺跡	弥生時代遺構配置図 (S=1/500)	30
第28図	大内原遺跡	1号竪穴住居跡 (S A 1) 実測図 (S=1/40)	31
第29図	大内原遺跡	1号竪穴住居跡 (S A 1) 床直上出土遺物実測図 (S=1/4)	32
第30図	大内原遺跡	1号土坑 (S C 1) 実測図 (S=1/20)	33
第31図	大内原遺跡	1号土坑 (S C 1) 出土遺物実測図 (S=1/4)	33
第32図	大内原遺跡	遺構外出土遺物実測図 (S=1/4)	34
第33図	大内原遺跡	中世遺構配置図 (S=1/500)	36
第34図	大内原遺跡	1号土壇 (S D 1) 実測図 (S=1/20)	38
第35図	大内原遺跡	1号土壇 (S D 1) 土師器小皿の出土状況 (S=1/20)	38
第36図	大内原遺跡	1号土壇 (S D 1) 出土遺物実測図 (S=1/2,1/4)	39
第37図	大内原遺跡	調査区内出土遺物実測図 (S=1/4,1/2)	40
第38図	大内原遺跡	1号溝状遺構 (S E 1) 分布状況図 (S=1/500)	42
第39図	大内原遺跡	1号溝状遺構 (S E 1) 土層断面図 (S=1/20)	42
第40図	大内原遺跡	時期不明の遺物実測図 (S=1/200)	43

表目次

第1表	天神本第2遺跡	縄文土器観察表	10
第2表	天神本第2遺跡	弥生土器観察表	19
第3表	大内原遺跡	弥生土器・古墳時代土師器観察表	35
第4表	大内原遺跡	石器観察表	35
第5表	大内原遺跡	中世出土遺物観察表	40
第6表	大内原遺跡	中世～近世石器観察表	41
第7表	大内原遺跡	石器観察表	43
第8表	大内原遺跡	遺物観察表	43
第9表	大内原遺跡	1号土坑 (S C 1) における放射性炭素年代測定の試料と方法	44
第10表	大内原遺跡	1号土坑 (S C 1) における放射性炭素年代測定結果	44

図版目次

図版 1	①天神本第2遺跡全景 (上空南より)		
	②基本層序 (調査区東壁)		21
図版 2	①掘り下げ完了後の状況 (東より)		
	②掘り下げ完了後の状況 (北より)		22
図版 3	①遺物集中箇所 (北より)		
	②遺物集中箇所 (南より)		23
図版 4	①出土石器類の接合作業の状況		
	②出土石器類 (1)		24
図版 5	①出土石器類 (2)		
	②出土石器類 (3)		25
図版 6	①出土石器類 (4)		
	②出土石器類 (5)		26
図版 7	①大内原遺跡遠景 (上空北より)		
	②大内原遺跡全景		49
図版 8	①1号竪穴住居跡 (S A 1)	②1号土坑 (S C 1)	
	③1号土壇 (S D 1) 川原石出土状況		
	④1号土壇 (S D 1) 土師器小皿出土状況		
	⑤1号溝状遺構 (S E 1)	⑥調査区北東部遺物出土状況	50
図版 9	①弥生土器 (確認調査B区出土)	②1号竪穴住居跡出土遺物	
	③1号土坑出土遺物	④遺構外出土弥生土器 (1)	
	⑤遺構外出土弥生土器 (2)	⑥遺構外出土弥生土器 (3)	
図版10	①遺構外出土弥生土器 (4)	②1号土壇出土遺物 (1)	
	③1号土壇出土遺物 (2)	④遺構外出土中世遺物 (1)	
	⑤遺構外出土中世遺物 (2)	⑥遺構外出土遺物	51
			52

第I章 はじめに

第1節 発掘調査に至る経緯

東九州自動車道(都農～西都間)は、平成元年2月に基本計画がなされ、平成9年3月には整備計画路線となった。さらに、平成9年12月に建設大臣(当時)から日本道路公団へ施行命令が出され、公団は翌年の2月から事業に着手している。それに伴い、宮崎県教育委員会が、平成10年度に路線上の遺跡分布調査を行い、計79箇所(896,000㎡)におよぶ遺跡の存在が確認された。

そこで、県文化課と公団との協議の結果、工事施工によって影響を受ける部分については、工事着手前に発掘調査を実施することになった。発掘調査は平成11年度から日本道路公団の委託を受け、宮崎県埋蔵文化財センターが行っている。

天神本第2遺跡では、平成15年度(平成16年1月26日～2月20日)に確認調査が実施され、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)層の上面で遺構が検出され、またK-Ah層下位より縄文時代の遺物が出土し、集石遺構の一部も検出されている。このため、遺構・遺物が分布すると想定される範囲を対象に発掘調査が実施されることとなった。一方、一段低い南側部分では3箇所のトレンチを設定したものの遺構・遺物は確認されなかった。このため480㎡の範囲については調査除外となった。本調査は平成16年7月12日に着手し、同年9月17日に終了している。遺物の整理作業は平成16年2月より行った。

大内原遺跡では、平成15年度に確認調査(平成15年11月10日～平成16年1月23日)が実施され、弥生時代及び中世の遺物が出土し、中世の土壌と考えられる遺構が検出された。このため、遺構や遺物が分布すると想定される3,300㎡を対象に発掘調査が実施されることとなった。本調査は平成16年11月8日に着手し、平成17年3月30日に終了した。調査の結果、中世の土壌のほか、弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴住居跡も確認された。遺物の整理作業は平成17年度に行なった。

なお、天神本第2遺跡の遺跡名は、東九州自動車

道関連の遺跡詳細分布調査報告書¹⁾に示された「天神本遺跡」の隣接地にあることから名付けられている。ただし、この「天神本遺跡」は今回の調査地の北東側に広がる台地を広範に含んでおり、川南町の「遺跡詳細分布調査報告書」²⁾では、本遺跡の北東に隣接する台地は「野田原遺跡」という名称となっている。「野田原遺跡」を含む本遺跡一帯の小字名は「北原」、その北東部の地域名は「鶴戸ノ木」、さらにその北東側が「天神本」であり、本来の小字名と遺跡名とが異なっている。

第2節 調査の組織

調査体制は次のとおりである。
調査主体 宮崎県教育委員会
宮崎県埋蔵文化財センター
所長

米良 弘康(平成15年度)
宮園 淳一(平成16～17年度)
副所長兼総務課長
大園 和博(平成15～16年度)
副所長兼調査第二課長
岩永 哲夫(平成15～17年度)
総務課長
宮越 尊(平成17年度)
主幹兼総務係長
石川 恵史(平成15～17年度)
調査第一課長
児玉 章則(平成15年度)
高山 富雄(平成16～17年度)
調査第一係長
谷口 武範(平成15～16年度)
主幹兼調査第一係長
長津 宗重(平成17年度)
調査第二係長
長津 宗重(平成15年度)
主幹兼調査第二係長
長津 宗重(平成16年度)
菅付 和樹(平成17年度)

整理作業担当

調査第一課

調査第一係主査 鶴戸 周成（平成16年度）

調査第二係主査 大村公美恵（平成16年度）

調査第一係主査 小山 博（平成17年度）

調査担当

（天神本第2遺跡）

調査第一課

調査第一係主査 鶴戸 周成（平成15年度）

調査第二係主査 白地 浩（平成15年度）

調査第二係主査 吉木 正典（平成16年度）

（大内原遺跡）

調査第一課

調査第二係主査 都成 量（平成15年度）

調査第二係主査 吉木 正典（平成16年度）

調査第二係主査 白地 浩（平成16年度）

調査・報告書編集担当

（天神本第2遺跡）

吉木 正典（平成16年度 埋蔵文化財センター

平成17年度 文化財課主査）

（大内原遺跡）

調査第一課調査第二係主査 白地 浩

東九州自動車道発掘調査指導委員（五十音順）

泉拓良 [京都大学] 小畑弘己 [熊本大学]

田崎博之 [愛媛大学]

広瀬和雄 [国立歴史民俗博物館]

本田道輝 [鹿児島大学] 柳沢一男 [宮崎大学]

第3節 遺跡周辺の環境

天神本第2遺跡及び大内原遺跡は宮崎県児湯郡川南町大字川南字北原に所在する（第1図）。

川南町は、宮崎県のほぼ中央東部の一角を占め、東には日向灘が広がり、北は都農町、西は木城町、南は高鍋町に接している。川南町の西部には標高1000m級の尾鈴山系が連なり、東麓にはなだらかな扇状地の地形が広がっている。

天神本第2遺跡は東にのびる緩やかな丘陵の端部に立地しており、尾鈴山系に源を発する小河川（篠原川）に面する。標高は約110mを測る（第2図）。

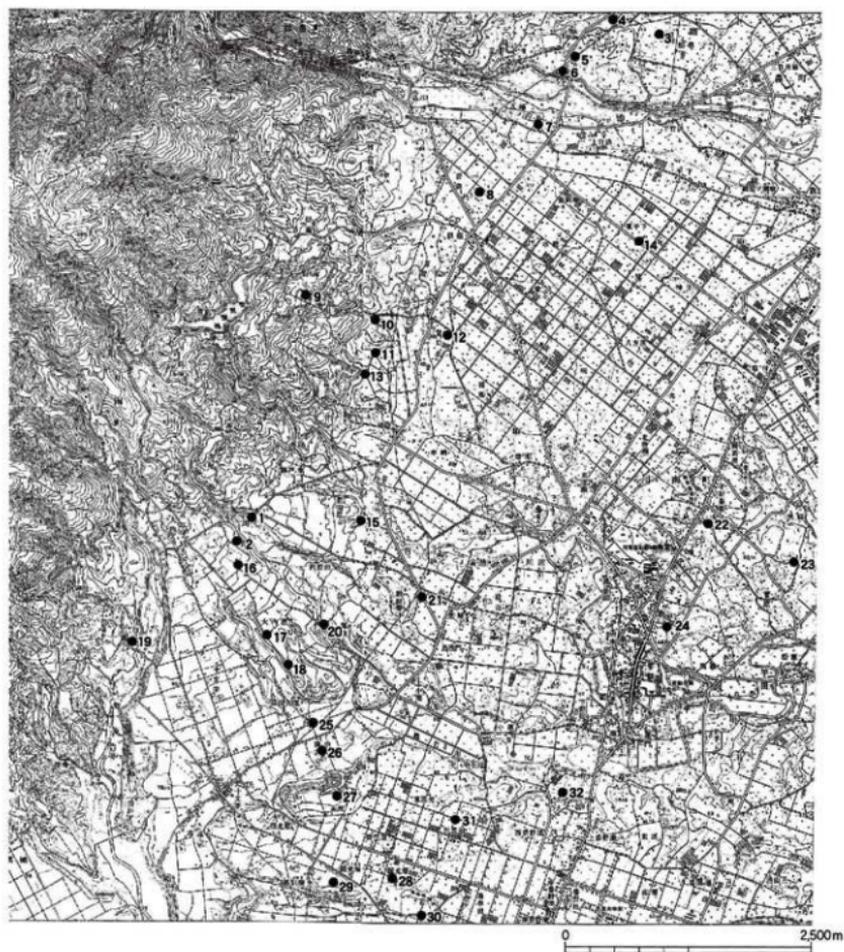
大内原遺跡は天神本第2遺跡の南に位置し、篠原

川の対岸にあたる。標高約120mの大内原台地より一段下った崖下にあたり、地形は西から東に向かってなだらかに傾斜している。低位の沖積段丘にあたり、標高は約107m（第2図）。

両遺跡の周辺では、国史跡の川南古墳群51～54号や県史跡の川南村古墳3～10号の存在が知られているが、滅失したものや所在不明のものがほとんどである。また発掘調査の実施例も、かつては弥生時代後期の堅穴住居跡が検出された中ノ迫A遺跡が知られていた程度であり、様相の判明する遺跡は少ない。東九州自動車道関連の発掘調査が、当地の歴史解明に大きく寄与するものと期待される³⁾。

註

- 1) 宮崎県教育委員会 1996『東九州自動車道関連遺跡詳細分布調査報告書2』
- 2) 川南町教育委員会 1983『川南町の埋蔵文化財 遺跡詳細分布調査報告書』
- 3) 宮崎県埋蔵文化財センター 2003『東九州自動車道（都農～西都門）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ』－宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書76－
宮崎県埋蔵文化財センター 2004『東九州自動車道（都農～西都門）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅳ』－宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書91－
宮崎県埋蔵文化財センター 2005『東九州自動車道（都農～西都門）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅴ』－宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書111－



- | | | | | |
|--------------|------------|------------|----------|--------------|
| 1 天神本第2遺跡 | 2 大内原遺跡 | 3 朝倉遺跡 | 4 朝草原遺跡 | 5 立野第5遺跡 |
| 6 立野第2遺跡 | 7 八幡第2遺跡 | 8 銀座第1遺跡 | 9 旭ヶ丘遺跡 | 10 登り口第2遺跡 |
| 11 谷ノ口遺跡 | 12 霧島遺跡 | 13 市納上第2遺跡 | 14 東平下遺跡 | 15 丸山西原遺跡 |
| 16 中ノ迫第1遺跡 | 17 中ノ迫第2遺跡 | 18 中ノ迫第3遺跡 | 19 白鬮遺跡 | 20 中ノ迫A遺跡 |
| 21 松ヶ迫遺跡 | 22 野稲尾遺跡 | 23 卒手遺跡 | 24 後牟田遺跡 | 25 前ノ田村上第1遺跡 |
| 26 前ノ田村上第2遺跡 | 27 赤坂遺跡 | 28 国光原遺跡 | 29 上ノ原遺跡 | 30 湯牟田遺跡 |
| 31 把言田遺跡 | 32 番野地C遺跡 | | | |

第1図 天神本第2遺跡・大内原遺跡周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)

第Ⅱ章 天神本第2遺跡の調査

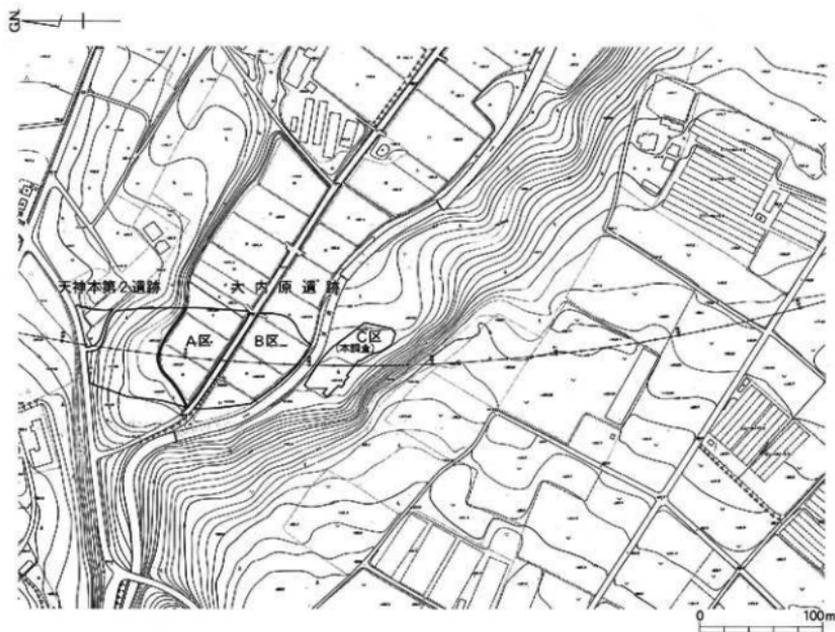
第1節 発掘調査・整理作業の流れ

本調査に先立ち実施された確認調査で、Ⅲ層鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)層上面検出の遺構(溝状遺構3条、道路状遺構1条)については、概ね記録作成まで終了している。本調査では主にK-Ah層下位の遺物包含層(縄文時代早期)の掘り下げ、記録作成を行った。K-Ah層の除去には重機を用いた。調査面積は確認調査220㎡、本調査660㎡である。

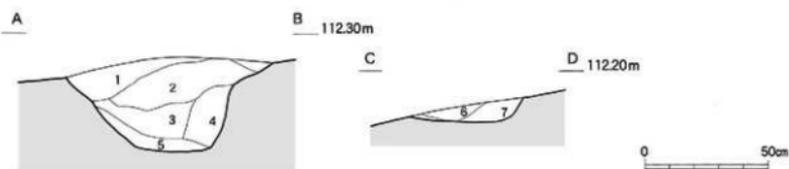
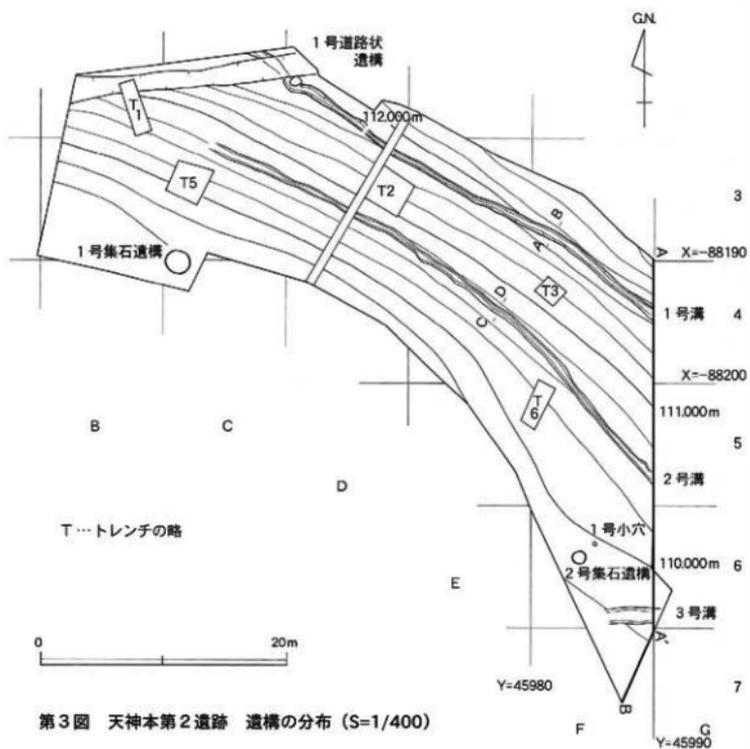
Ⅳ層上面が露出した段階で国土座標に基づく杭の設置を行い、10mグリッドを組んだ。グリッド名は

西よりA～G区、北より1～7区として、その組合せで表記することとした(第3図)。

本調査ではK-Ah層下位の遺物包含層であるⅣ層(後述)の掘り下げを進めていった。その結果、Ⅳ層中より集石遺構が1基検出され、既に確認調査の際に検出されていた1基とあわせて、計2基の集石遺構があることが判明した。またⅣ層下部からⅤ層上部より多数の遺物が出土している。そのほとんどは剥片・破片で、F-5・6区付近に集中している(以下「遺物集中箇所」と称する)。一方、西側では遺物はほとんどみられない。



第2図 天神本第2遺跡・大内原遺跡の立地と周辺地形 (S=1/4,000)



第4図 天神本第2遺跡 1号溝・2号溝埋土の堆積状況 (S=1/20)

調査期間の前半は連日の猛暑、後半は二度の大型台風に見舞われるなど、作業環境の維持に苦労したが、9月13日に空中写真撮影を実施（業務委託）し、9月15日までに掘り下げ・遺物取上げ・遺構実測等の作業を終える。9月16・17日に、重機を使用して埋め戻しを行っている。

遺物整理については、全工程について埋蔵文化財センター本館で行った。特に石器類の接合に重点を置いた（図版4）。

第2節 層序

基本層序は下記のとおりである（第5図参照）。

- I・表土・耕作土。樹根を多く含む。
- II・黒褐色土。弥生土器などの遺物を含む。
- III・鬼界アカホヤ（K-Ah）に比定される明黄褐色の火山灰層。上部は土壌化が進む。
- IV・暗褐色土。やや固い。東九州自動車道基本層序のMB0に相当する。特に下部を中心に縄文時代早期の遺物を包含する。
- V・褐色土。下部は自然礫を多く含む。

なお、V層以下は、長径30cmをこえる礫が密集する礫層となる。

以上は、今回の調査範囲にほぼ共通して認められる層序であるが、確認調査のトレンチ3（第3図のT3）のみ、IV・V層が厚く堆積し、それらの中間的色調の黒褐色土が見られるなど、大きく様相が異なっている。トレンチの大きさからみて、遺構の埋土である可能性は低いため、この地点から南方向に向けて、小さな埋没谷があったと推定される。

第3節 旧石器時代終末期の遺物

1 概要

IV層下部より細石刃が1点出土しているが、該期単独の遺物包含層は明確に捉えられていない。またIV層下部からV層上部にかけて出土した碎片の中に細石刃と目される個体が4点認められた。いずれも剥離方法や断面の形状などが細石刃の特徴を示している。

それらの出土地点は、後に触れる縄文時代の遺物集中箇所（北寄りにあたる（第6図））

2 遺物（第7図）

1は流紋岩製の細石刃核。F-5区のIV層下部より出土している。円柱状の母岩の一端に打撃を加えて平坦面を形成し、その面を打面として細石刃を全周にわたり連続して剥出する。剥取された細石刃の刃長は約2.5～3.0cmである。

2～5は細石刃であった可能性のある個体である。いずれも黒曜石製。一部に使用によるものと推測される微細な剥離が認められる。5は灰黒色を呈する針尾・淀姫系黒曜石とされる石材のもの。

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物

1 概要

前述のとおりIV層において集石遺構が2基検出された（第3図）。また遺物集中箇所を中心に、IV層下部からV層上部にかけて土器・石器類（石鏃およびその未製品、剥片、碎片）が出土している。遺物の出土総点数は1,260点に及ぶ。さらにV層上面で小穴1基を含む落ち込みが見られたが、いずれも不整形で人為的なものとは考えがたい。

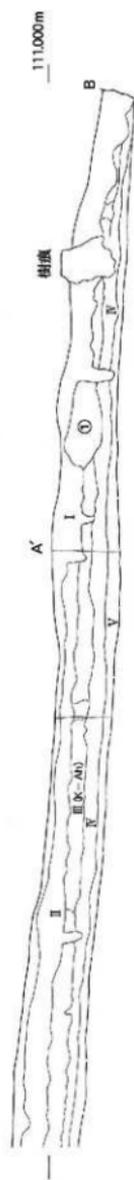
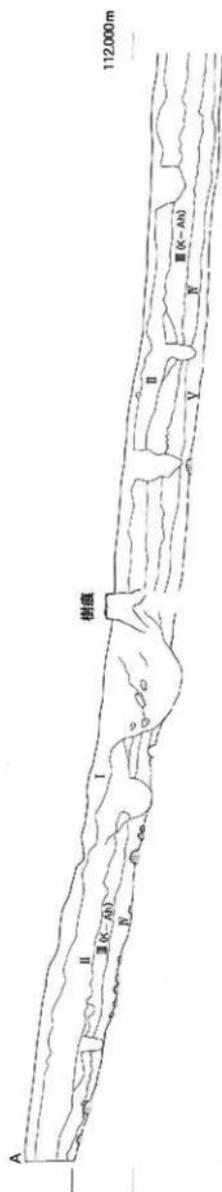
2 遺構

1号集石遺構は、確認調査時に検出されていたもので、調査区南西側の谷に面する位置にある（第8図）。約2.0m×1.8mの範囲に赤化礫を含む礫を集める。一部樹根の影響を受け、礫の位置が動いている。

赤化礫の比率は目視で約7割程度で、中央部と南東側に多くみられる。円礫、亜円礫が多いが、周辺部には破砕礫もある。礫は頁岩や尾鈴山酸性岩類などで構成される。礫の下部にはごく浅い掘り込みがあり、埋土は黒色味の強い褐色を呈し、炭化物粒や炭化物片が混入している。

2号集石遺構は、遺物集中箇所に近いF-6区にある（第8図）。平面形は径約0.9mの円形を呈する。

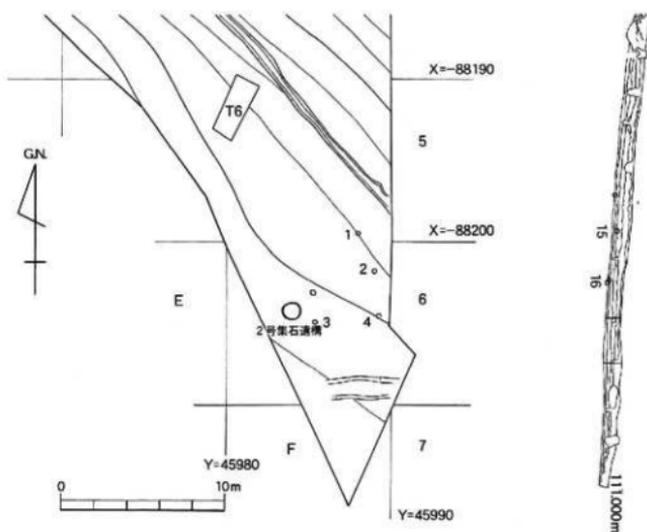
上面の礫はほとんど赤化しており、円礫はほとんどみられない。一方、下部には明瞭な掘り込みがあり、比較的大きめの扁平礫が8個配されている。整然と並べられた感じではないが、掘り込みの底面に貼りつけられている。上部・下部いずれの構成礫と



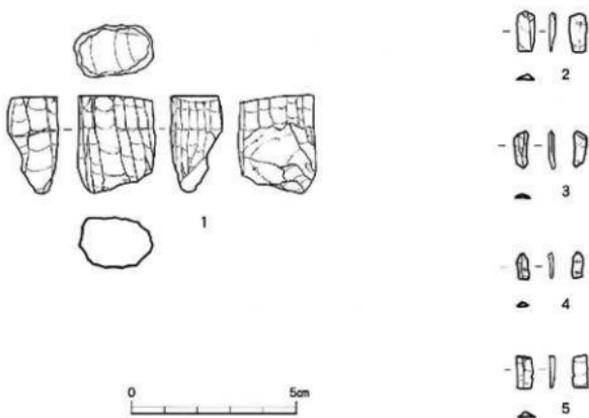
①3号溝埋土



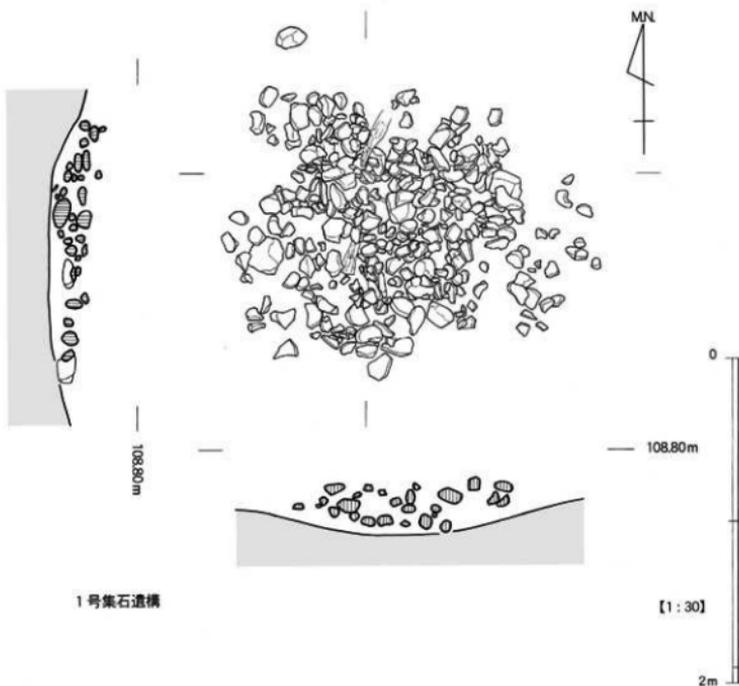
第5圖 天神本第2遺跡 東壁層位圖 (S=1/80)



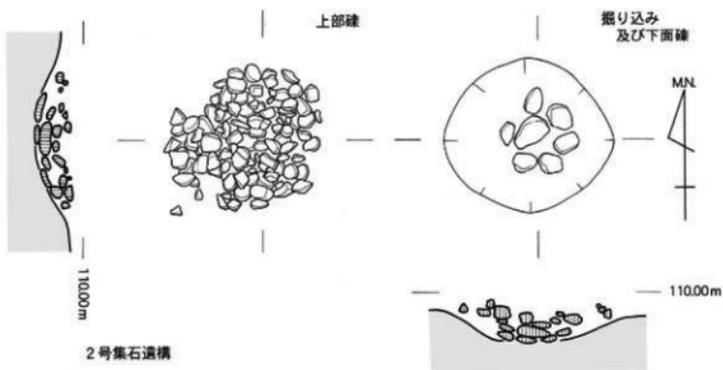
第6図 天神本第2遺跡 旧石器時代終末期の遺物の分布状況 (S=1/300)



第7図 天神本第2遺跡 後期旧石器時代終末期の遺物 (S=2/3)



1号集石遺構



2号集石遺構

第8図 天神本第2遺跡 集石遺構 (S=1/30)

も、1号集石遺構同様、頁岩や尾鈴山酸性岩類の占める割合が高いようである。この比率は、V層以下の層でみられる自然礫と同様の傾向を示しており、周辺で容易に得られる礫を用いて築かれた可能性が高い。

F-6区の2号集石遺構北東側では、やや色調の淡い褐色を呈する埋土の小穴が検出されたが、出土遺物は皆無であった。

3 遺物① -土器-

分布域は大きく2箇所に分かれる。IV層下部からV層上部の層準で出土している(第9・10図)。押型文系土器に属するものが多数を占める。

6と7は楕円文を施すもので、6は口縁内面の上部にも施文する。

8は横方向の山形文を施す個体で、接合はしないものの同一個体と見られる破片が図示したもの以外に1点ある。F-4区の北側付近に散在するような分布状況を示している。口縁部片のaから、口縁部内径で約9.0cm程度の小形に属する資料であることや若干波状となることなどがわかる。また、器壁が厚く、口唇部の面をとることで文様帯を作出している。

9も山形文を施すが、口唇部が先細りになるなど、

8とは器形が大きく異なる。内面上部に縦方向の短沈線文を刻する。

10のa~cも同一個体とみられる。図示したものの以外に小破片が5点出土している。いずれもF-6区の遺物集中箇所より出土。二次的火熱を受けた痕跡があり、器壁が赤褐色に変色している箇所が認められる。11も山形文を施す個体の底部近くの破片である。文様は崩れて規格する資料であることや若干波状となることなどがわかる。また器壁が厚く、口唇部の面をとることで文様帯を作出している。

9も山形文を施すが、口唇部が先細りになるなど性が低く、粗い印象を与えている。

12は無文の土器である。これについても他に数点小さな破片がみられた。aは口唇部の破片であり、口唇部を丸くおさめている。

13は刻みの浅い山形文を施す個体。狭い口唇部や内面上部にも同じ原体による文様がみられる。

14も刻みの浅く間のびした山形文を施すもので、頸部付近の破片であろうと考えられる。

15は、ここまで触れた資料とは時期的に隔たがりがあると考えられる。外面に沈線文を施し、大きく開く口縁部を有する。

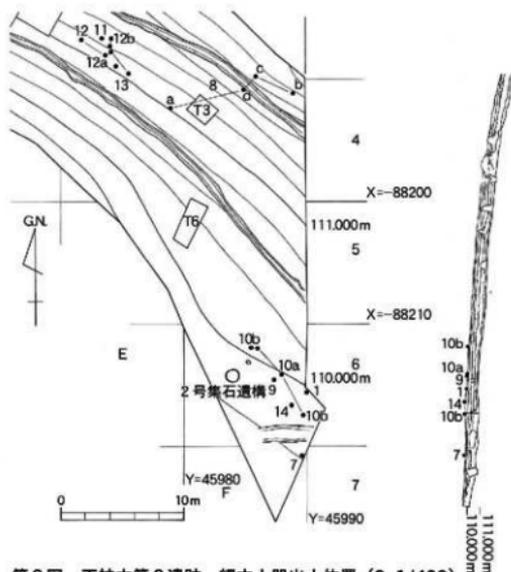
第1表 天神本第2遺跡 縄文土器観察表

番号	出土位置	出土層	色調(外/内)	調整・文様(外面)	調整・文様(内面)	胎土(混入物等)	備 考	
6	F-6	V上	にぶい褐	楕円押型文	楕円押型文	灰白色粒	復原内径4.3cm	
7	F-6	V上	赤褐	楕円押型文	ナテ	赤褐色粒		
8a	E-4	V上	明赤褐	山形押型文	条痕	赤褐色粒		
8b	F-4	V上	明赤褐	山形押型文	ナテ	白色粒		
8c	F-3	V上	明赤褐	山形押型文	ナテ	赤褐色粒		
8d	F-4	V上	明赤褐・にぶい赤褐	山形押型文	ナテ・条痕	赤褐色粒		
9	F-6	V上	灰黄褐・にぶい橙	山形押型文	短沈線文・山形押型文	灰白色粒		口唇部欠損
10a	F-6	V上	明赤褐・灰黄褐	山形押型文	ナテ	灰白色粒		
10b	F-6	V上	にぶい褐	山形押型文	ナテ	灰白色粒・赤褐色粒		
10c	F-6	V上	橙	山形押型文	ナテ	灰白色粒		
11	E-3	V上	明赤褐	山形押型文	ナテ	光沢黒色粒		
12a	E-3	V上	にぶい赤褐	ナテ	ナテ	光沢黒色粒		
12b	E-3	V上	明赤褐	ナテ	ナテ	灰白色粒		
13	E-3	V上	にぶい黄橙	山形押型文	ナテ・山形押型文	灰白色粒		
14	F-6	V上	暗黄灰	山形押型文	ナテ	灰白色粒・黒色光沢粒		
15	1号道路	-	橙・にぶい黄橙	沈線文	ナテ	灰白色粒		

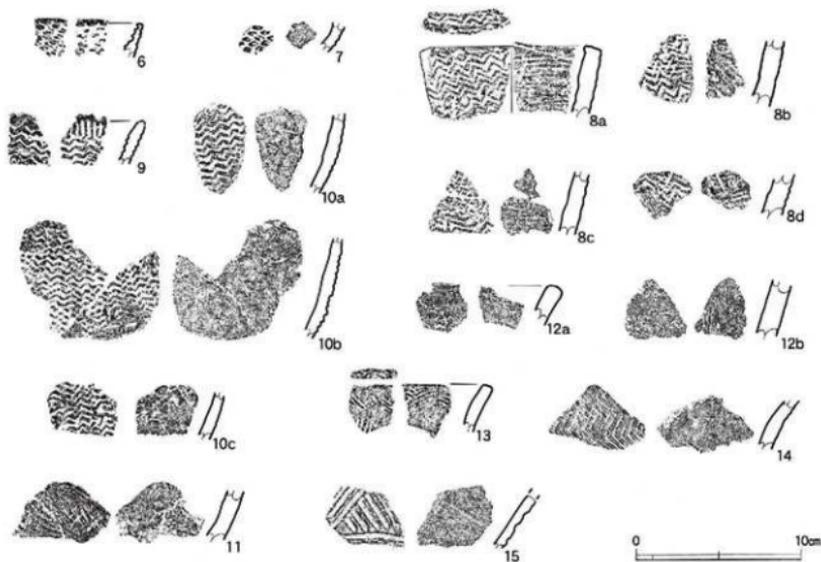
1:10,000m



GN



第9図 天神本第2遺跡 縄文土器出土位置 (S=1/400)



第10図 天神本第2遺跡 縄文土器実測図 (S=1/3)

4 遺物② 一石器類一

前述のとおり、多数の剥片・砕片や石核の類が出土している。発掘調査時に、原則としてそれら全ての位置を記録し、取り上げた。整理の際には接合を重視し、行動復原を目指した。

以下、石材別にその特徴と分布状況を示す。なお、この石材分類はあくまでも肉眼観察によるものであり、全て正しく結果を反映しているとは限らない。特にチャートの小破片については識別の難しいものが多い。

黒曜石については、これまでの知見により産地・系統がほぼ特定できる(第11・12図)。

黒曜石Ⅰ類は褐色を呈する姫島産とされるもの。2点認められ(16・17)、うち1点は石鏃である(16)。表面に特有のザラザラした感じがある。剥離は明瞭でない

黒曜石Ⅱ類は黒色を呈し、白い気泡が多く入る。小国産とされる石材であろう。確認できたのは2点で(18・19)、製品はみられない。

黒曜石Ⅲ類は漆黒色で透明度が高い。桑ノ木津留産とされる石材であり、数量的に最も多い。透明の地に縞状の黒色帯が入る個体がある。また胎色に近く、腰岳産とされる石材に近いものもいくつか認められる。遺物数は42点で、そのうち5点のみ円化している(20~24)。それ以外はほとんどが5mm四方以下の砕片である。F-6区を中心に分布するが、一部はやや離れたE-4区で出土している。出土層は、IV層中でも比較的上部から出土する傾向を示している。製品は、石鏃が2点認められた。20と21がそれであり、互いの平面距離は約1.8mと近接していることや特徴が似ることから、同一個体の凹基の石鏃と考えられる。割れの原因は特定できない。

黒曜石Ⅳ類は、いわゆる針尾・淀姫系とされるもので、2点認められた。うち1点が25であり、3.0×2.0cm大の母岩から剥片を剥ぎ取った石核状の個体である。

チャートは、大きくは6種に類別可能である(第13~19図)。ただし小破片では区別が容易でない。

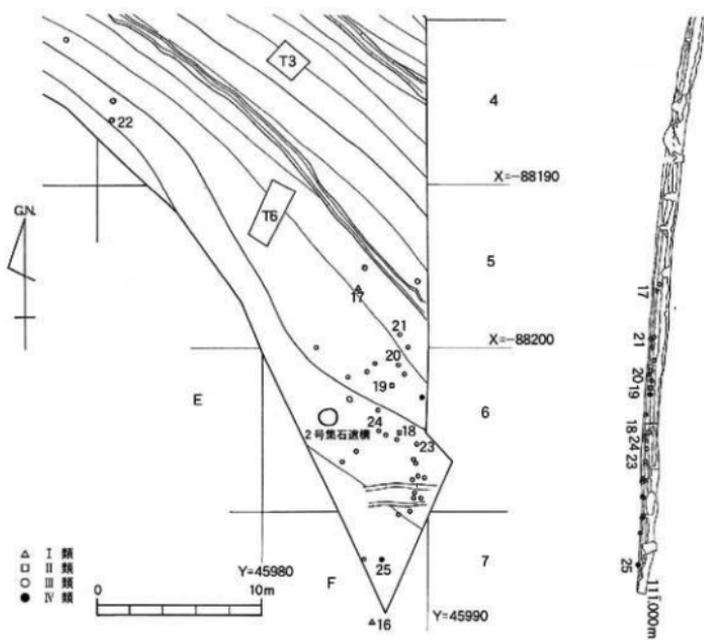
チャートⅠ類は青灰色を基調とし、ところどころ黒色部分が帯状に入る。確認できたものだけで112

点の遺物が出土している。F-6区にまんべんなく分布する。IV層からV層上位より出土している。製品は上半部を欠く石鏃1点(26)のみである。27・28及び30~32は接合資料である。このうち27は4点の剥片の接合資料で、F-6区の比較的狭い範囲内に分布していた。28も2点ともF-6区内の近接する位置より出土している。30は5cm四方ほどの大きさの母岩に側面から打撃を加え、剥片を取っている。遺物集中箇所から離れたE-3区土の剥片が接合しており、最大で約25m離れた位置にあった。32はF-6区とG-6区の境界付近、及びF-7区より出土しており、約5.5m離れた位置で出土している。

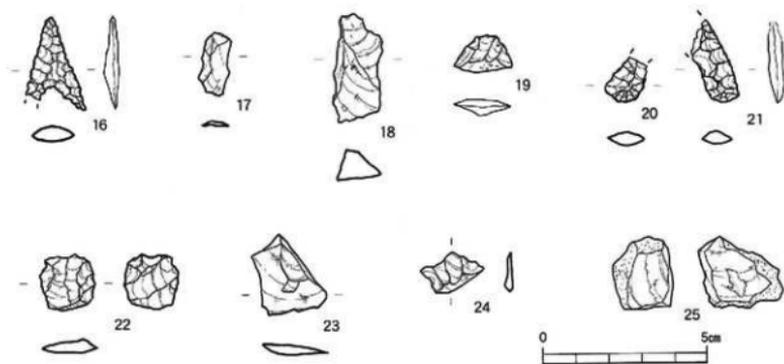
チャートⅡ類は、チャートⅠ類よりも表出する黒色部分の比率が高い。同系統の石材であった可能性もある。46点の遺物が確認された。やはりF-6区にまんべんなく分布する。この石材を用いた石鏃が3点出土している(33~35)。36は石鏃の未製品であろうか。40と41は剥片の接合資料であり、F-6区とG-6区の境界付近で出土している。

チャートⅢ類はやや黄色がかった青灰色を基調とし、黒ずんだ部分がところどころみられる。黒色帯の際はさほど明瞭でなく、混じりあった感じとなる。黄色味がかった部分は透明感が強く、そのみでは姫島産黒曜石の質感に似る。確認できた遺物の点数は690点上り、類型別の数としては最も多い。F-6区を中心に出土している。この石材を用いた石鏃が6点出土したほか、未製品と目される個体が2点認められた(48・49)。石鏃は挟りの深さ、身の幅など多様性に富む。48と49は細かな調整が及んでおらず、厚さを減じる作業も中途となっている。51~52は剥片の接合資料である。また54は表裏両面とも剥片を取った残核状の個体である。その他、微細なものも含め砕片が多数を占めるが、53のような石刃状の個体もある。

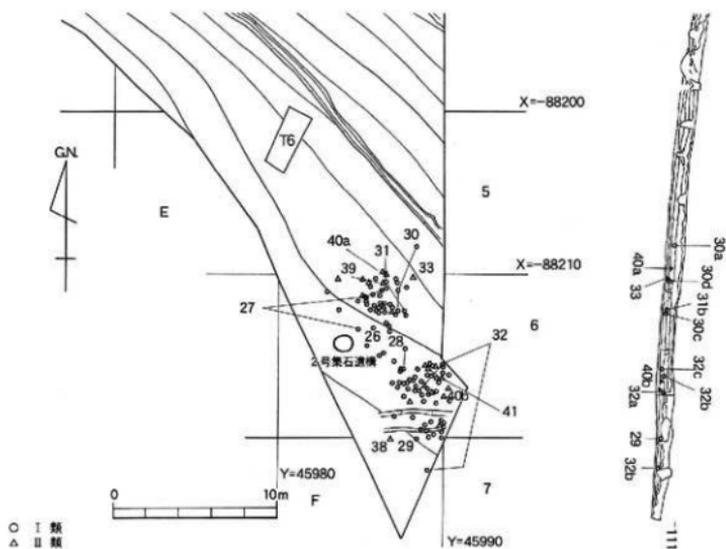
チャートⅣ類は透明感のある黄白色を基調とし帯状ないしは線状に黒色帯が入る。黒色帯・黒色線の際は明瞭である。遺物の点数は62点。F-6区を中心に分布する。この石材を用いた石鏃が4点出土した(内3点は欠損品)ほか、未製品と目される個体



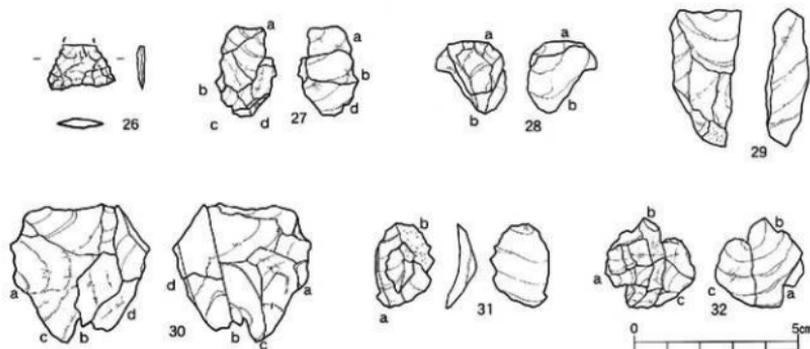
第11図 天神本第2遺跡 黒曜石製品・石材出土状況 (S=1/300)



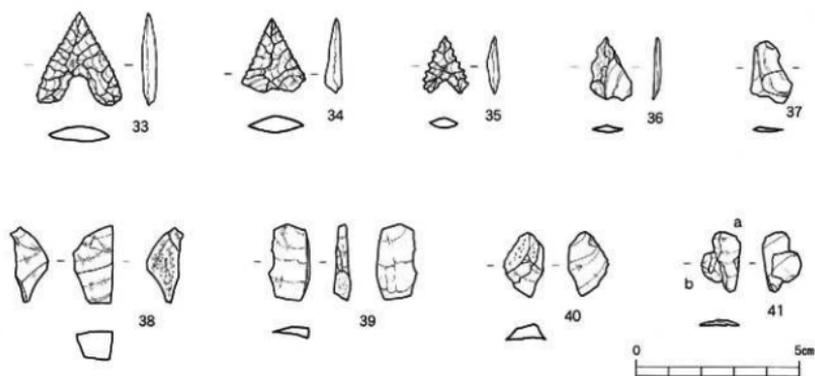
第12図 天神本第2遺跡 黒曜石製品・石材実測図 (S=2/3)



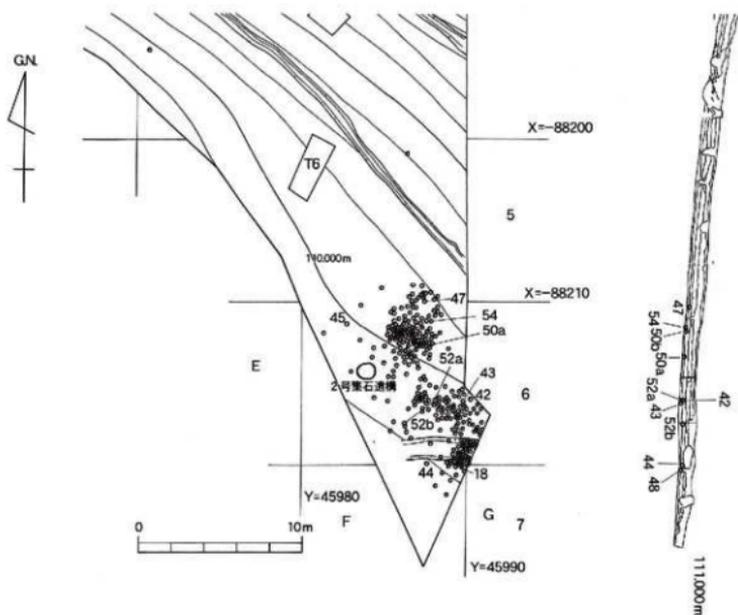
第13図 天神本第2遺跡 チャートI類・II類製品・石材出土状況 (S=1/300)



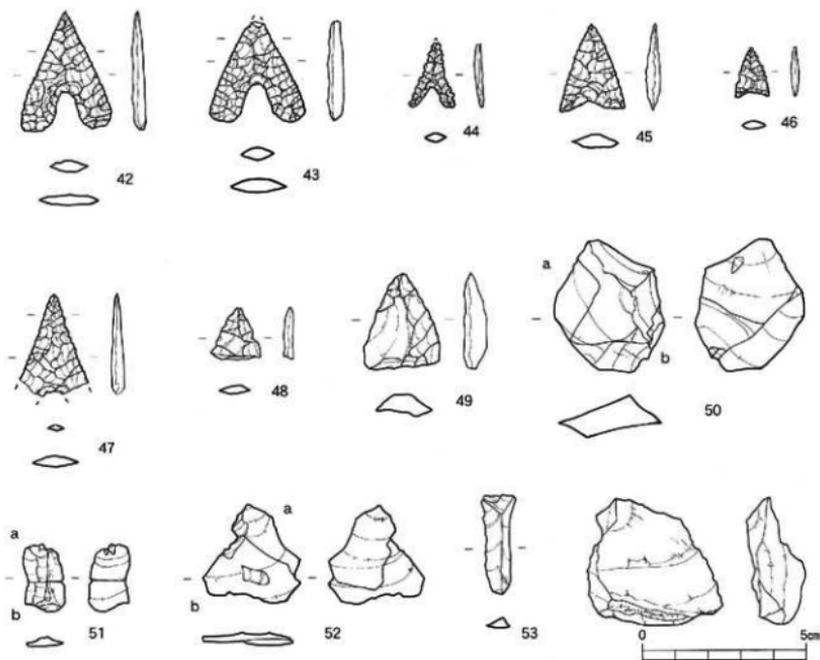
第14図 天神本第2遺跡 チャートI類製品・石材実測図 (S=2/3)



第15図 天神本第2遺跡 チャートⅡ類製品・石材実測図 (S=2/3)



第16図 天神本第2遺跡 チャートⅢ類製品・石材出土状況 (S=1/300)



第17図 天神本第2遺跡 チャートⅢ類製品・石材実測図 (S=2/3)

が2点認められた。57は先端部の、58は脚部の破片であろう。

チャートⅤ類は黒色を基調とし、自然の鉄分が貫入する。チャートⅣ類と同一石材である可能性も考えられるが、違いを重視し、分離した。識別できたのは5点のみである。この石材を用いた石鏃が1点ある(62)。63は自然面を残す残核状の個体で、接合資料である。

チャートⅥ類は、やや赤味がかった白色を呈し、褐色の筋状の縞が入る。確認できた遺物数は25点と多くはないが、F-6区内に一定量分布している。この石材を用いた石鏃が1点(64)、未製品と目される個体が1点出土している(65)。

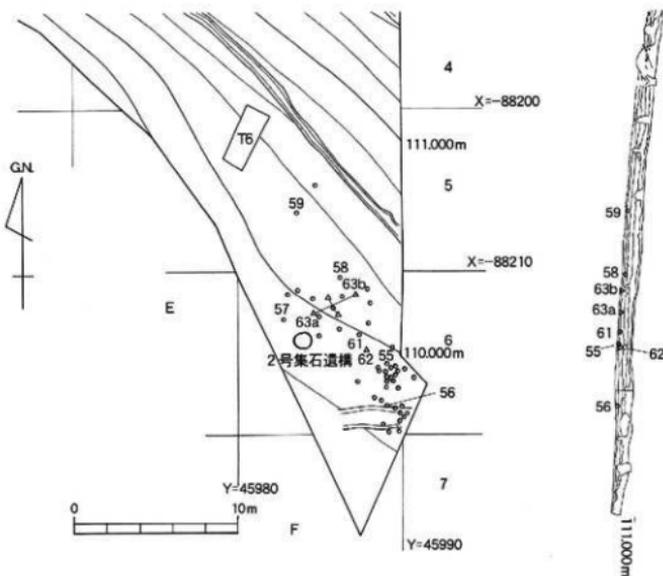
以上の他、いずれの類型にも含まれないチャートの石材・剥片が少量認められた。

流紋岩系統と見られる石材は、比較的大きな剥片が12点出土している。66は灰色を呈する残核状の個体。67は黒色を呈する剥片である。

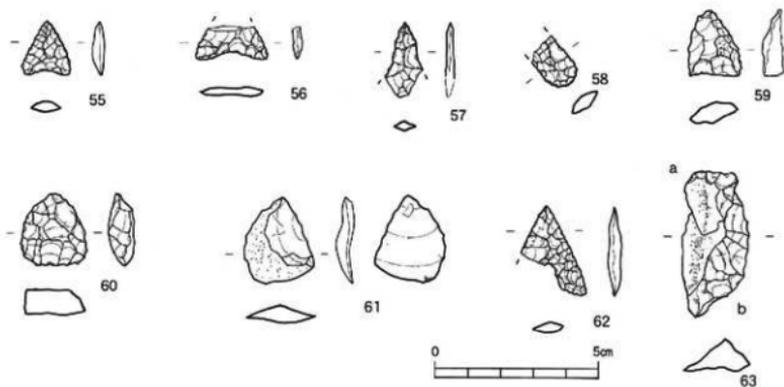
尾鈴山酸性岩類系統の石材は、やや赤みがかった白色を基調とし黒色の鉱物が粒状に多量混入する。剥片が一定量認められる。近辺で産する石材である。分布状況は他の石材と異なり、西側にも分布域が広がっている。この石材を使用した製品は認められない。

以上の他、砂岩や頁岩、ホルンフェルス製の剥片が少量出土している。

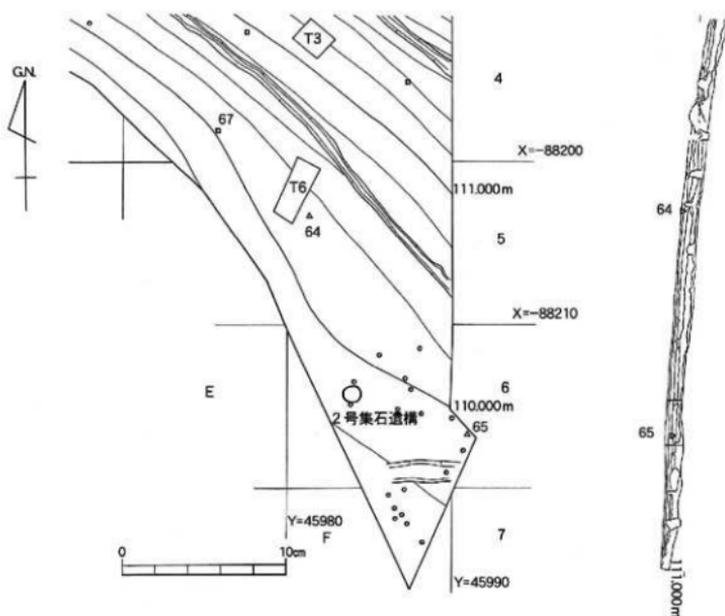
以上が出土石器類の石材別の状況である。それらが平面・垂直的に重層化して遺物集中箇所を形成している。詳しい分析は第7節に譲るが、特にチャートの占める割合が高いことが特筆される。



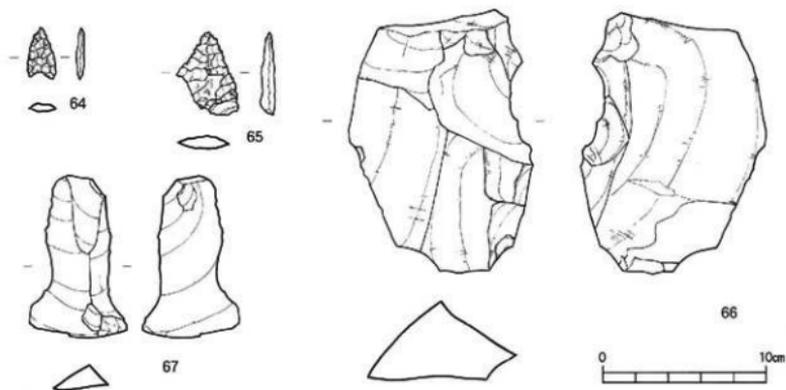
第18図 天神本第2遺跡 チャートIV類・V類製品・石材出土状況 (S=1/300)



第19図 天神本第2遺跡 チャートIV類・V類製品・石材実測図 (S=2/3)



第20図 天神本第2遺跡 その他の石材・製品等出土状況 (S=1/300)



第21図 天神本第2遺跡 その他の石材・製品等実測図 (S=2/3)

第5節 弥生時代の遺物

中世以降の遺構埋土中やⅡ層中より出土している。数量的には多くはない。

68は口縁部がわずかに外反し、下位に断面三角形の突帯を巡らせる。外面にススが付着している。

69は「T」字状の口縁部を形成するもので、形態は北部九州の須玖式系の特徴を備えている。ただし胎上は一般的にみられる該期の個体と変わりはない。口縁部以下は明確でないが高杯であろうか。器表面は剥落しているが、わずかに赤色顔料の痕跡が認められる。

70は小破片で判断が難しいが壺か鉢の口縁部か。

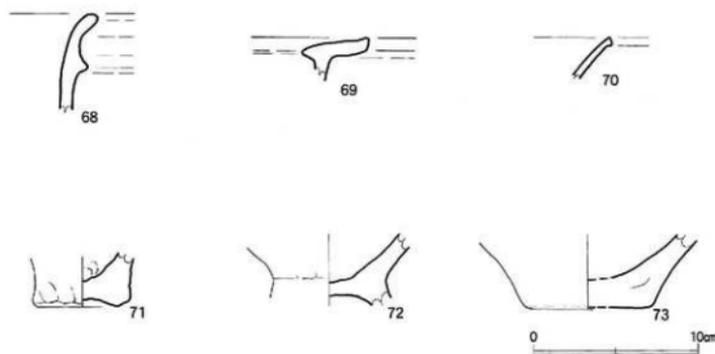
71～73は底部で73は壺のそれであろう。71はわずかに上げ底となる。

第6節 中世以降の遺構

溝状遺構3条と道路状遺構が1条検出されたが、遺物がほとんどなく、時期比定が難しい(第3図)。

1号溝と2号溝は、いずれも等高線に沿うように走る。1号溝は上面幅約1.0～0.7m、検出面からの深さは約0.2～0.4m。道路状遺構に切られる。2号溝は上面幅約0.7～0.5m、検出面からの深さは約0.2mと浅い。3号溝は方向が異なる。上面幅は1.4m、深さは0.2mである。全て埋土はⅡ層系統で、黒褐色を呈する。

道路状遺構は、上面の遺物(比較的新しい磁器)や周囲での聞き取りなどから、近代まで存続していたとみられる。ただし掘削時期はわからない。幅は1.5～2.0m。底面には硬化面が認められる。



第22図 天神本第2遺跡 弥生土器実測図 (S=1/3)

第2表 天神本第2遺跡 弥生土器観察表

番号	出土位置	層	色調(外/内)	調整・文様(外/内)	胎土(混入物等)	備 考
68	B-3	Ⅱ	にぶい黄褐	ナデか(不明瞭)	白色粒	外面スス付着
69	道路遺構	-	浅黄	ナデか(不明瞭)	赤褐色粒・小礫	外面に丹塗りの痕跡
70	//	-	にぶい黄橙	ナデ	灰色粒	
71	B-3	Ⅱ	灰黄	ナデ	褐色・灰色粒	底面にも指ナデ痕
72	道路遺構	-	浅黄	工具によるナデ	赤褐色粒・灰色小礫	脚台状
73	//	-	にぶい橙・黄橙	工具によるナデか	白色・灰色粒・小礫	

第7節 まとめ

1 遺物集中箇所について

(1) 分布状況と遺物包含層のあり方

今回の調査においては、旧石器時代終末期から近代にいたる各種の遺構・遺物が確認されたが、最も重要な成果は縄文時代早期に属する遺物集中箇所が捉えられたことであろう。そこを中心に出土する石器類は、剥片・砕片（特に微細な砕片）がほとんどであり、石鏃やその未製品が出土していることが特徴として挙げられる。製品と剥片・砕片との接合は認められなかったため、製作の直接的な復原はできないが、下記のような分布上の特徴が指摘できる。

まず、石材別に重量の比率を見るならば、チャートが圧倒的に量的多数を占めることが分かる。肉眼観察により6類に分類したが、あるいは同一系統の石材の部分的差異であるのかもしれない。平面分布状況を見るならば、F-6区の遺物集中箇所の中に3つの小群が形成されていることが判明する。ただし小群を越えて接合する個体もあり、出土層もIV層からV層上部にまたがることから、単純にそれらの小群が石器製作の単位の痕跡と捉えることには慎重にならざるを得ない。とはいえ、石鏃の未製品や製作に伴う微細な砕片が多く見られることから、F-6区を中心とする一角は、少なくとも石器の製作に関わる場であることは確かであり、繰り返しの使用による形成時の二次的移動や、堆積後の攪乱作用による平面・垂直移動により重層化したものと考えられる。

一方、黒曜石の分布は、チャートほどの集中を示さない。さらに流紋岩や尾鈴山酸性岩類製の剥片は、高位の北西側にまで分布域が広がる。これらの石材を用いた石器製作は、チャートのそれとは異なり、粗放的な石材獲得、製作が行われた可能性が高い。

そういった縄文時代早期の石器製作址は、さほど類例が無く重要である。ただし生活の場との関連は本遺跡では解明できない。未調査の南東側に広がっていたものと推定しておきたい。

なお、黒曜石製の石器群の中には一部旧石器時代

終末期（細石刃文化期）のものが含まれている。そのことを示す資料は細石刃核の1である。

(2) 出土土器

遺物集中箇所の主たる形成時期は、同一箇所内で出土した土器から判断して、縄文時代早期中葉の押型文系土器期と考えられる。ただし、出土土器の型式は単一ではない。

口縁部の先端が尖り気味となる9は、横方向への施文であることや内面に縦方向の短沈線文を施す（いわゆる原体条痕）こと等の特徴から東九州編年における早水台式に位置付けられる¹⁾。一方、浅めの山形押型文を施す13や14は手向山式に属するとみられる。この両者間の型式差は大きい。口唇部への施文が特徴的な8のa・bや、無文の12のa・bが上記のどれかに共伴するの可否は、にわかには判断できない。特に無文土器の共伴については議論が続いており、その行く末を見定めねばならない。15は早期後半の平格式に属する個体であろう。

このように出土土器の型式からは、複数の時期にわたって遺跡が形成されたこと、また出土量から、小人数・短期間の活動であったことが推定できる。狩猟の際の基点として、断続的に来訪する場であったのであろう。

2 弥生土器に関して

点数は多くないが、包含層や後世の遺構埋土中より弥生土器が出土している。中でも須玖式系土器の出土は注目される。やや上げ底気味となる甕の底部や平底の壺の底部から、時期は下っても中期後半から後期前半に収まるとみているが、個体毎の時期幅もある。

なお、該期の木遺跡の性格については、木遺跡内の情報のみでは判断できない。

注

1 坂本嘉弘 1996「西日本の押型文土器の展開 一九州からの視点一」『古文化談叢』35 九州 古文化研究会



①天神本第2遺跡全景（上空南より）



②基本層序（調査区東壁）



①掘り下げ完了後の状況（東より）



②掘り下げ完了後の状況（北より）



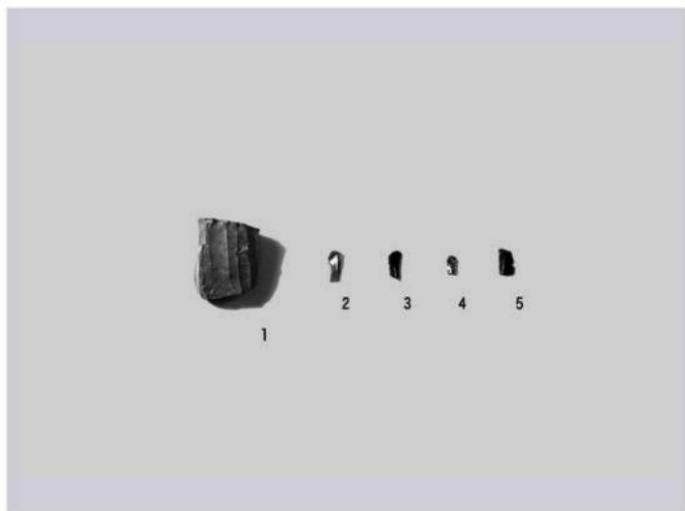
①遺物集中箇所（北より）



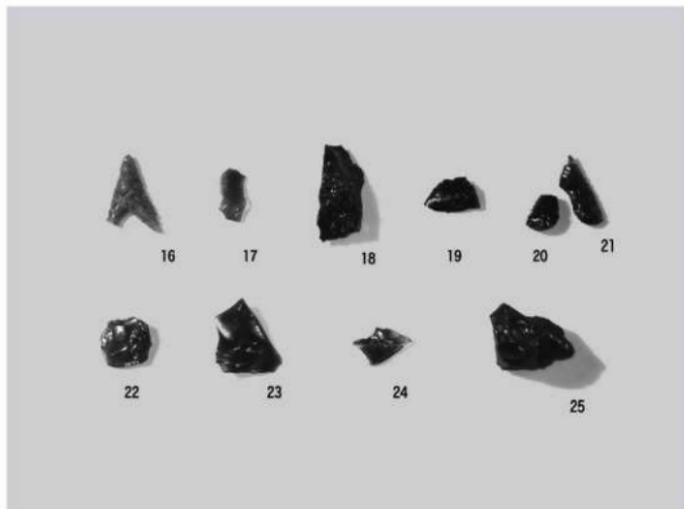
②遺物集中箇所（南より）



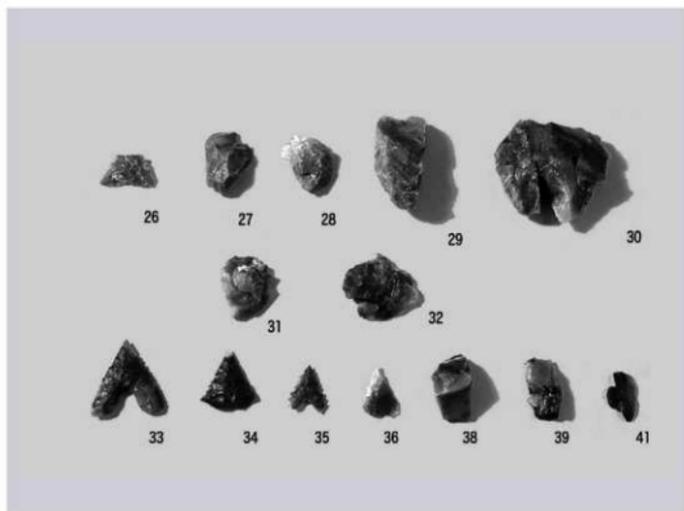
①出土石器類の接合作業の状況



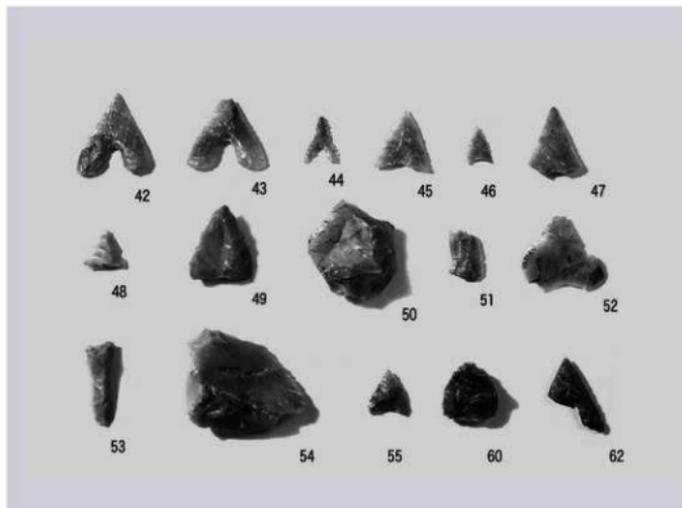
②出土石器類（1）



①出土石器類(2)



②出土石器類(3)



①出土石器類 (4)



②出土石器類 (5)

第三章 大内原遺跡の調査

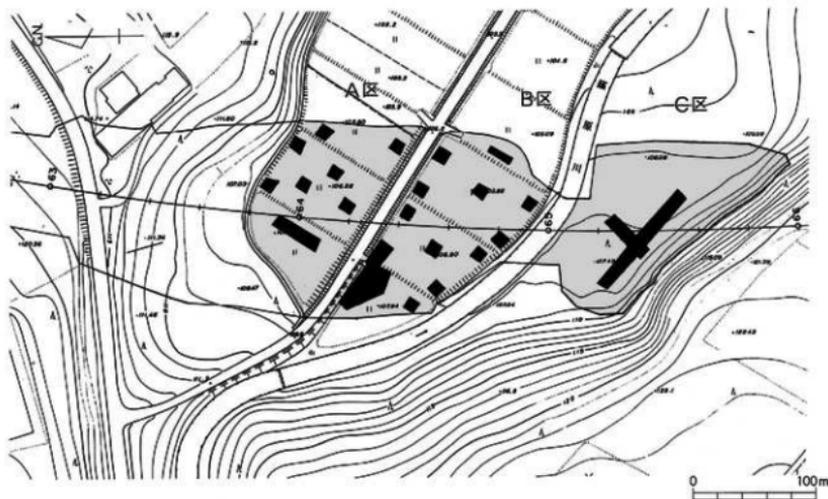
第1節 確認調査の概要

本遺跡での確認調査は調査区域のうち篠原川右岸でⅢ層 (K-Ah) の残存状況がよいため、当初の予定面積2,900㎡より調査対象範囲を広げて6,300㎡の調査を行うことにした。便宜上、北からA区～C区として調査を実施した(第23図)。

篠原川左岸にあたるA区とB区は、旧地権者からの聞き取り調査では以前は表土に礫が多数見られたとのことである。試掘の結果からも礫が多く堆積していたことから、重機を使用して5m×5mのトレンチを19本、3m×10mと5m×20mのトレンチを各1本入れ土層の堆積状況を調べた。その結果、礫混じりの客土や大小の礫を多量に含む砂礫層が厚く堆積しており、氾濫原の様相を呈していた。B区の黄褐色砂質土層中から弥生土器(第24図1・2・3)が出土したが広がりは見られず、流れ込みによるものと判断した。出土した遺物は多くが小片であっ

た。弥生時代中期～後期のものと考えられる。

篠原川右岸にあたるC区では、黒色土層及びK-Ah層は川の浸食をあまり受けなかったために残存状況がよかった。しかし、K-Ah層下位層は砂礫を多く含み、篠原川の氾濫原であったと考えられる。C区の調査はⅢ層 (K-Ah層) 上位のⅡa層・Ⅱb層(黒色土層)に東側の斜面に沿って南北方向に5m×50m、東西方向に5m×20mのトレンチを各1本入れた。土器片が出土したが、新旧のものが混在していることと比高差約13mの台地(中ノ迫第1遺跡)が調査区南側に立地することから流れ込みによるものと思われる。特筆すべき遺構として、アカホヤ上面で検出された土壇(SD1)と考えられる遺構があげられる。トレンチ断面で確認したもので平面形は明らかではないが、土器器皿が3点出土した。K-Ah層上面において、調査区南側で溝状遺構も検出したことから、篠原川右岸にあたるC区3,300㎡を対象とする本調査が決定した。



第23図 大内原遺跡 確認調査トレンチ配置図 (S=1/4,000)

第2節 発掘調査・整理作業の流れ

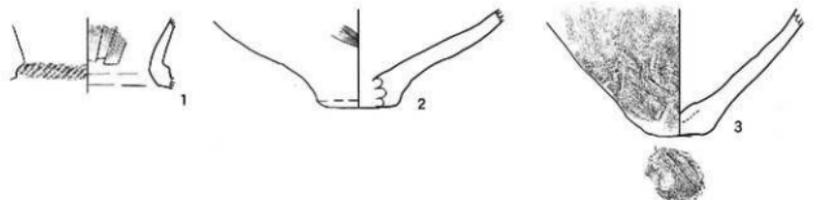
本調査では、Ⅲ層(K-Ah層)上位の遺物包含層であるⅡa層・Ⅱb層(黒色土層)の掘り下げを進めていった。

その結果、確認調査で検出された土壌(SD1)1基のほかに、Ⅲ層(K-Ah)層上面で竪穴住居跡(SA1)1軒、土坑(SC1)1基、自然流路と考えられる溝状遺構1条が検出された。竪穴住居跡は弥生時代終末～古墳時代初頭のもと考えられる。また、土坑は埋土中の炭化物の自然科学分析を行った結果、弥生時代のものである可能性がでてきた。一方、遺物は調査区西側で多く出土し、東側になるにしたがって出土量が少なくなる。出土した遺物は細片化

が著しい。本遺跡は南側に接する中ノ迫第1遺跡が立地する台地下段(比高差13m)にあり、中ノ迫第1遺跡においても、弥生時代後期の遺物が確認されており、本遺跡の弥生土器は中ノ迫第1遺跡のものと同関連する可能性がある。土壌は、埋土中から出土した土師器皿や遺構付近から出土した東播系須恵器から13～14世紀の遺構と推測される。埋土中から黒書石も3点出土している。

整理作業は、全工程について埋蔵文化財センター本館で平成17年5月～平成17年10月に行った。

報告書作成にあたっては、整理作業と平行して土壌と土坑の埋土のフローテーション及び遺構図面等の整理、報告書原稿作成を行った。



第24図 大内原遺跡 確認調査B区出土遺物実測図(S=1/4)

※第3表参照

第3節 基本層序

本遺跡の堆積土壌は、調査区北東側を流れる篠原川の影響を受け、その状態はあまり良くない。層ごとの堆積状況は下記のとおりである(第26図)。

第Ⅰ層:表土(10YR2/2)。樹痕が多く見られる。弥生土器が出土する。

第Ⅱa層:黒色土(7.5Y2/1)。土の目がやや粗くしまっていない。さらさらしている。弥生時代・古墳時代・中世の遺物を包含する。

第Ⅱb層:オリーブ黒色土(7.5Y2/2)。粘質土。湿り気を帯びてややしまっている。

第Ⅲ層:アカホヤ(K-Ah)。橙色土(7.5YR6/6)。堆積状態がよい。上面で竪穴住居跡(SA1)1軒、土坑(SC1)1基、自然流路と

考えられる溝状遺構1条が検出される。

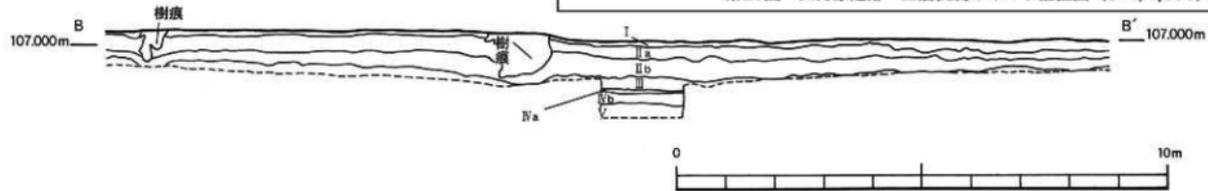
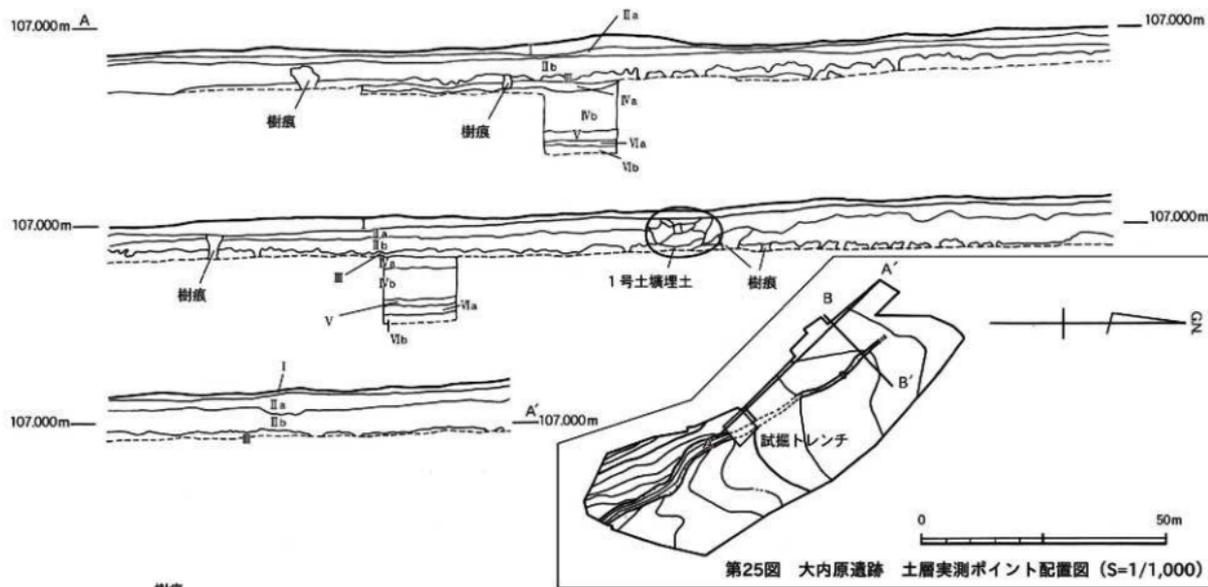
第Ⅳa層:黒褐色土(7.5YR2/1)。アカホヤの細かい粒が酸にまじる。

第Ⅳb層:オリーブ黒色土(7.5Y3/2)。堅くしまっている。径1cm～3cmの川原石が密に混入。所々に径10cm程度の川原石が入る。この層から下位層は篠原川の氾濫原と考えられる。

第Ⅴ層:砂礫(10YR4/4)。径1cm～3cmの川原石の間に砂が入る。

第Ⅵa層:褐色土(10YR4/4)。砂や川原石がまじり、しまりが無い。

第Ⅵb層:褐色土(10YR4/6)。粗い砂に川原石がまじる。しまりはない。橙や暗褐色の褐鉄鉱が縞状に入る。白いバミスも含む。

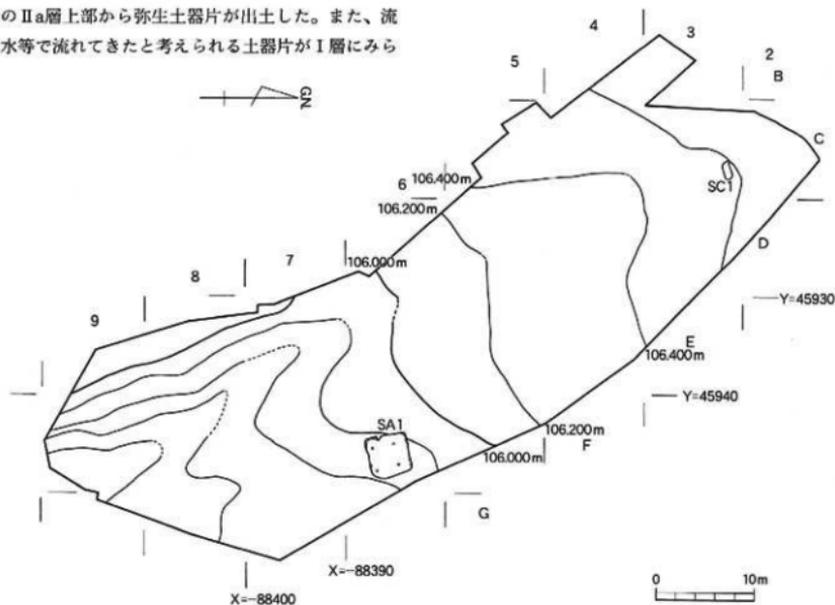


第26図 大内原遺跡 土層断面図 (S=1/100)

第4節 弥生時代・古墳時代の遺構と遺物

弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴住居跡1軒及び土坑1基が検出された(第27図)。主に調査区西側のⅡa層上部から弥生土器片が出土した。また、流水等で流れてきたと考えられる土器片がⅠ層にみら

れた。Ⅱa層及びⅠ層で出土した土器はほとんど小破片である。調査区東側での遺物の出土は僅かであった。古墳時代の遺物は、須恵器の小片が一点出土した。



第27図 大内原遺跡 弥生時代遺構配置図 (S=1/500)

1 1号竪穴住居跡 (SA1 ; 第28図)

調査区東側のF6グリッドで検出された。第Ⅲ層(K-Ah層)上面で検出され、ほぼ平地に立地する。隅丸方形を基調としたもので、南東部分に間仕切りの突出壁をもつものである。壁はほぼ垂直である。規模は長軸4.0m、短軸4.3m、深さは検出面から0.26mを計る。床面積は17.2㎡である。主柱穴は4本で柱間は東西2.2m、南北2.3mを測る。主軸方向はN-20°-Wを指す。中央部付近には焼土が確認される。

埋土は3層に分かれ、1層は黒色土で炭化物を少量含む。2層は黒褐色土でK-Ahの細かい粒がまじり炭化物を少量含む。しまりはない。3層は黒褐色

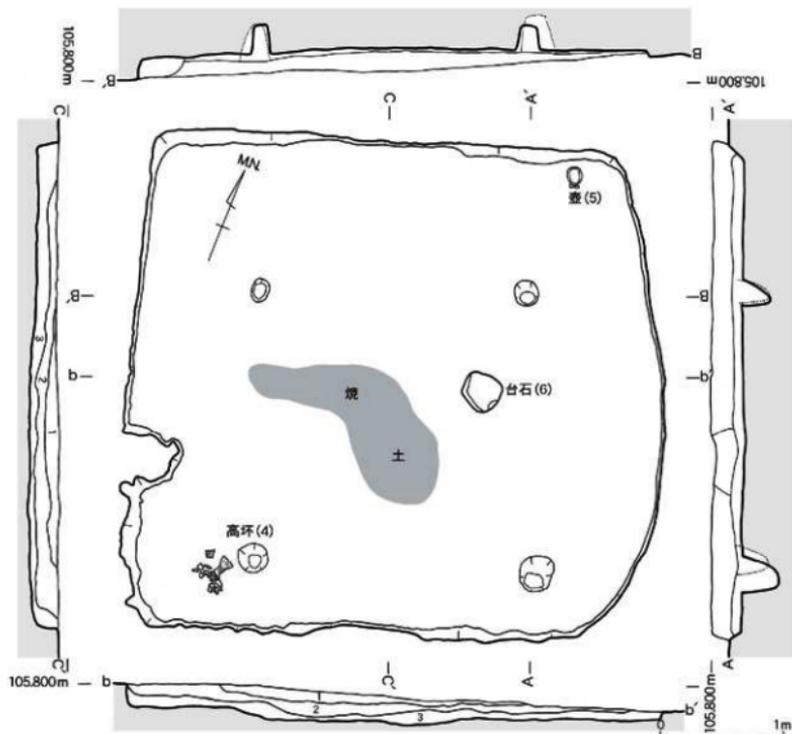
土で径1mmから3cmのK-Ahブロックを約30%含む、湿り気がなくさらさらしていて押すとへこむ。これらの状況から埋土は人為的に埋められたものではなく、自然埋没したものと考えられる。床面はほぼ平坦であるが中央付近がややくぼんでいて、3層を除去すると基本層序のIVb層がみえ、礫を多く含む層にあたる。

柱穴は3層下部で検出され、直径14cm～30cm、深さ20cm～30cmのものが4本、方形配置されている。住居の外では、確認できなかった。柱穴は地面にほぼ垂直である。なお、住居の出入り口は確認できなかった。

遺物は高坏、壺、台石が床面で各1点ずつ出土した。高坏(第29図4)は、南西部壁付近で口縁部をほぼ南方向に向け、倒れた状態で出土した。胎上に5mm以下の白色粒や3mm以下の黒色粒を含む。ほぼ完形で、丸みのある坏底部と体部の境に指押さえの跡が残る明瞭な稜をもち、外反する口縁部がつく。脚柱部からゆるく屈曲してわずかに内湾しながら裾部がつく。指で成形した跡が多く残る。外面・内面とも調整はミガキが主体である。脚部内側には工具ナデがみられる。壺(第29図5)は、北東部壁付近で口縁部を南南東方向に向け、倒れた状態で出土し

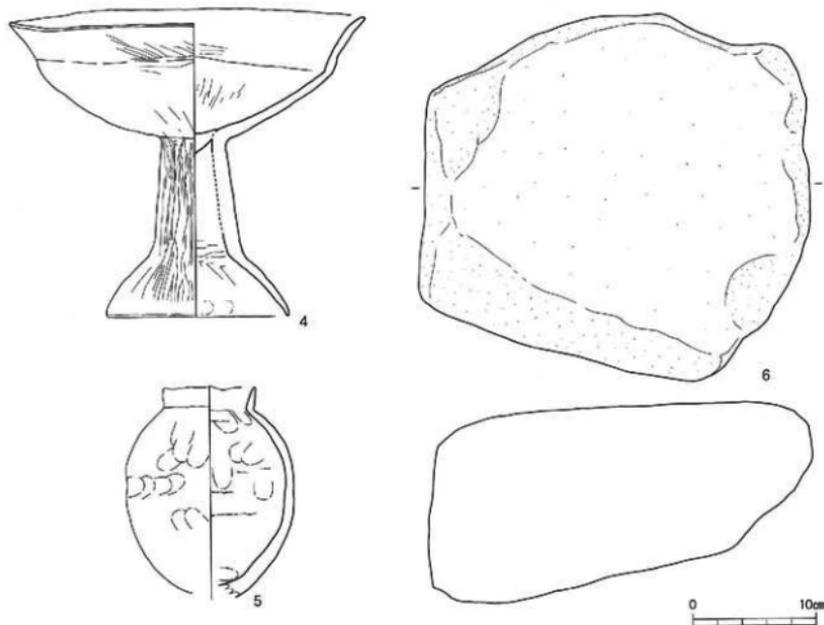
た。ほぼ完形の不安定な小さな平底を有する短頸壺である。肩部と胴部にはスガが付着している箇所がみられる。胎上に1mm~5mmの褐色、灰色の粒を含む。口縁部は指でつまんであり、ゆるやかな波状になっている。内面、外面とも粘土ひもを積み上げ成形したと思われる指押さえの跡を多く確認できる。器面調整はナデが主体となり、粘土のつなぎ目が数か所にみられる。台石(第29図6)は中央部東側で出土した。使用石材は尾鈴酸性岩類である。

出土した高坏と壺から考えて、この堅穴住居跡は弥生時代終末~古墳時代初頭の住居と思われる。



【現地記】SA1
 1 灰土(土層SP17.1)は穴内を少量含む。土のほがや中層と違ってない。さらさらしている。
 2 壺(土層SP22.2)は穴内を少量含む。灰土の層かいて含む。土はまがや中層と比べてやや
 している。厚みは中である。
 3 高坏(土層SP17.1)は穴内を少量含む。厚1mm~2mmの灰土がこの高坏の30%を占
 める。サラサラとして押すとこへこみ。厚みは2cm。

第28図 大内原遺跡 1号堅穴住居跡(SA1)実測図(S=1/40)



第29図 大内原遺跡 1号竪穴住居跡 (SA1) 床直上出土遺物実測図 (S=1/4)

2 1号土坑 (SC1; 第30図)

調査区西側のC3グリッドにおいてⅢ層上面 (K-Ah) で検出された。平面プランは方形をとり、床面はほぼ平坦である。この土坑の規模は長軸175cm、短軸90cm、深さ19cmである。

埋土は2層でレンズ状堆積をなす。床面から5cm~20cm浮いた状態で多量の炭化材と弥生土器数点が出土した。炭化材は丸太状のものが中心部まで炭化しており太さが5cmのものもみられた。板状のものはみられなかった。土器は1層から第31図7・8・9、2層から10が出土した。

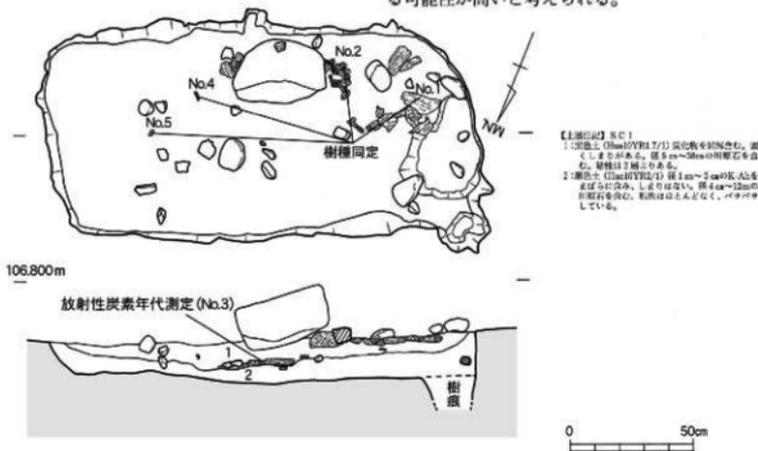
第31図7は壺の肩部で刻み目突帯が施され、外面は丁寧なナデの後にミガキがみられる。刻み目突帯に指頭痕を残す。内面は横方向のナデがみられる。

8は壺の胴部で突帯をもち外面は横方向の丁寧なナデ、内面は横方向のナデがみられる。9は壺の胴部で外面は工具によるハケ目の後、ミガキがみられる。内面は横ナデである。10は壺の口縁部~頸部で口縁部が「く」字状に外反する。口唇部にナデ調整を施し凹面状を呈する。内外面とも工具による丁寧なナデがみられ、外面にはススが附着している。なお、この遺構付近では炭化物や川原石は出土していない。

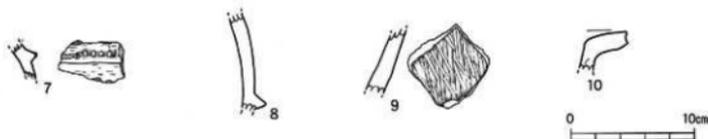
この遺構については、床面から約5cm浮いた状態で出土した炭化材を試料として1点採集し、放射性炭素年代測定を実施した。その結果、補正年代値として2,180±40年BP (1σの暦年代でBC360~290、BC230~180年) という年代が得られた。また、試料

5点(放射性炭素年代測定を実施した炭化材1点を含む)の樹種同定を実施した。その結果、No1~No4はブナ科スダジイ、No5はアワブキ属アワブキ科と同定された。スダジイは、西南日本に分布する照葉樹林の主要高木で、やや乾燥した台地や斜面に分布し、二次林の構成要素にもなる。アワブキ属は、山地に普通に生育する広葉樹である。いずれも温帯

ないし、温帯下部の暖温帯に分布する樹種であり、当時の遺跡周辺もしくは近隣で採取可能な樹種であったと考えられる。フローテーション法による床付近の埋土の洗浄では、炭化米107点とケシ粒状の種子が確認された。種実同定は行っていない。この土坑は、埋土出土の遺物や炭化材の放射性炭素年代測定の結果から考えると弥生時代中期後半の遺構である可能性が高いと考えられる。



第30図 大内原遺跡 1号土坑(SC1)実測図(S=1/20)



第31図 大内原遺跡 1号土坑(SC1)出土遺物実測図(S=1/4)

3 遺構外出土遺物(第32図)

IIa層上部から出土したもので、弥生時代の遺物は壺・甕・高坏である。古墳時代の遺物は須恵器の小片一点のみである。

11は長頸壺で、櫛描波状文が2箇所施されており、上下2箇所の櫛描波状文により切られている。壺は、胴部に刻目突帯を有するもの(12・13・14)、突帯を有するもの(15・16・17)の2種ある。口唇部

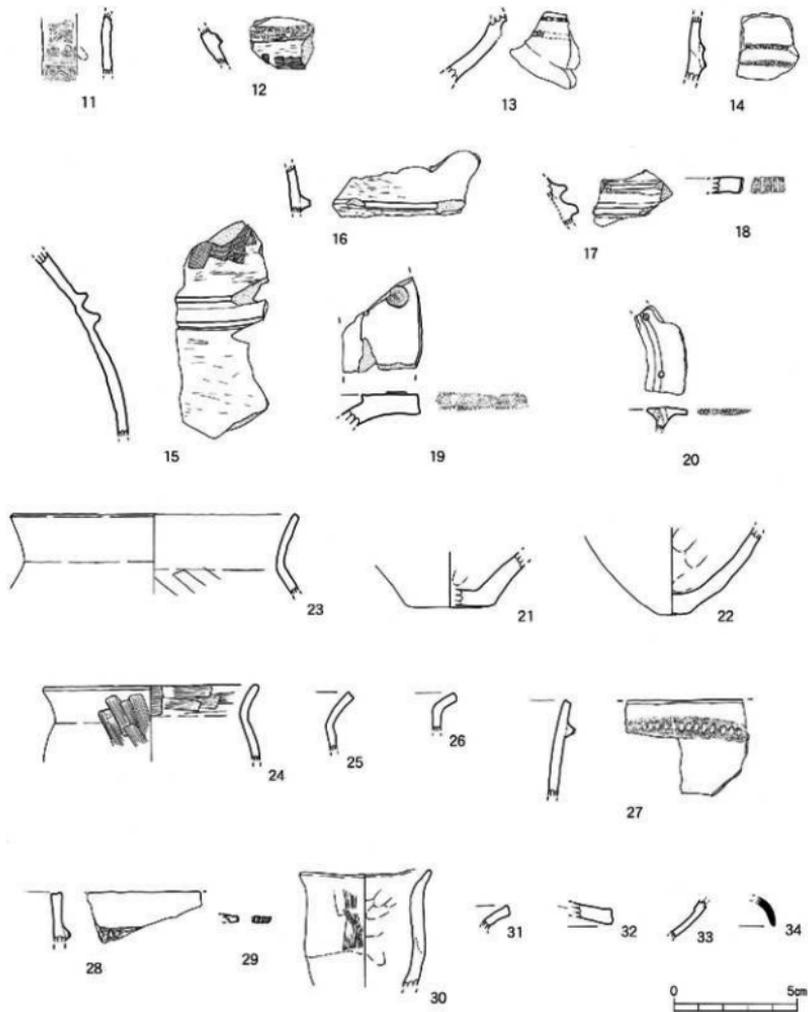
に刻目目が施されているもの(18)、口唇部に鋸歯文が施され、口縁部内面に円形浮文が施されているもの(19)、口唇部に刻目目をもち穿孔があるもの(20)もみられる。底部は安定した平底(21)、小さい平底(22)がある。

甕は口縁部が緩やかに「く」の字に外反するもの(23・24・25・26)、刻目突帯を有するもの(27・28)、口唇部に刻目をもつもの(29)、口唇部が舌状に薄

く尖り、口縁部が指押えにより緩やかな波状になっているもの(30)がある。31は内外面ともナデ調整、口唇部にもナデ調整が施されている。高坏は脚部

(32)、坏部(33)が出土している。

古墳時代の遺物は34のみで6世紀後半から7世紀初めの須恵器の坏蓋と思われる。



第32図 大内原遺跡 遺構外出土遺物実測図 (S=1/4)

第3表 大内原遺跡 弥生土器・古墳時代土器観察表

調査号	出土地点	種類	器種	部位	流量(cm) 口径 使用部位	手法・原料・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考	
						外面	内面	外面	内面			
1	B区	弥生土器	壺	胴部～胴部	—	—	斜方位のキザミ目、ナデ	黄いナデ、斜方位の黒色調	朝雲柄	黄緑	微細～3mm大(2mm最多)の白色不透明、赤褐色、黒色光沢の粒を含む。	
2	B区	弥生土器	壺	胴部～底部	—	—	垂直、斜方位のハケメの後ナデ、指痕	斜方位のハケメ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	微細～5mm大(1mm最多)の無色透明、黄灰色、白色不透明の粒を含む。	
3	B区	弥生土器	壺	胴部～底部	—	—	垂直のハケメ、指痕、粒なきとよがり付りている。ナデが認められる	彫化が著しい、指痕	にぶい黄緑	明赤	微細～7mm大(微細最多)の無色透明、白色不透明、灰白色の粒を含む。	スス付着
4	SA1	弥生土器	高坏	底部	26.7x14.7x5.1	—	ミガキ、指痕	ミガキ、工具ナデ	黄	黄	5mm以下の白色粒、3mm以下の黒色粒、1mm以下の透明光沢粒多し	
5	SA1	弥生土器	壺	口縁	7.3	17.0	ナデ、指痕	ヨコナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	1～5mmの褐色、灰色の粒を含む。	
7	SD2	弥生土器	壺	胴部	—	—	指痕、斜め目盛り付り等、ていねいなナデの後ミガキ	ナデ	灰黄緑	灰黄緑	2mm以下の褐色粒と1mm以下の透明粒をわずかに含む。	
8	SD2	弥生土器	壺	胴部	—	—	横方向のナデ	ナデ	(上)灰黄	—	微細～1mm大の無色透明の微細粒、微細～1mm大の赤褐色の砂粒を含む。	
9	SD2	弥生土器	壺	胴部	—	—	ナデの縁ミガキ、ほぼ平面的ハケメの横ミガキ	横ナデ、垂直	灰白	灰黄緑	微細～3mm大(2mm最多)の灰白色、赤褐色の粒を含む。	
10	SD2	弥生土器	壺	口縁～胴部	—	—	ナデ、垂直	ナデ、工具によるナデ	灰黄緑	にぶい黄緑	微細～1mm大の無色透明の微細粒、微細～1.5mm大の白色不透明の砂粒	スス付着、炭化物付着
11	IIa南	弥生土器	壺	胴部	—	—	波状文様が2か所、上下2か所の縦指痕	—	明赤	明赤	微細～2mm大の赤褐色、褐色の粒、4mm大の白色不透明な粒を含んでいる。	
12	IIa南	弥生土器	壺	胴部	—	—	台形状斜め目盛り、ていねいな横ナデ、斜方位のハケメの後ミガキ	削削	にぶい黄緑	にぶい黄緑	5mm以下の灰白色粒を少し含む	スス付着
13	IIa南	弥生土器	壺	胴部	—	—	斜め目安帯、ナデ	ナデ	にぶい黄緑	浅黄	微細～2mm大(微細最多)の白色不透明、赤褐色の砂粒を含む。	
14	IIa南	弥生土器	壺	胴部	—	—	ナデ、斜め目安帯	荒いナデ、ナデ	にぶい黄緑	浅黄	微細～3mm大(微細最多)の白色不透明、赤褐色の砂粒を含む。	スス付着
15	IIa南	弥生土器	壺	胴部	—	—	ハケ目盛、ていねいな横ナデ、突帯、へらみぎの後にナデ	彫化が著しい	にぶい黄	にぶい黄	5mm以下の灰白色粒と微細から1mmの黒色光沢粒を少し含む。	炭化物付着
16	IIa南	弥生土器	壺	胴部	—	—	ミガキ、垂直、突帯	削削	黄、灰黄緑	黒緑	4mm以下の灰色、白色粒を少しと、微細な黒色光沢粒をわずかに含む。	
17	IIa南	弥生土器	壺	胴部	—	—	ナデ	彫化が著しい	黄	明赤	微細～3mm大(1mm最多)の白色不透明、赤褐色、黒色光沢の粒を含む。	スス付着、16と同一個体の可能性あり
18	IIa南	弥生土器	壺	口縁	—	—	ナデ	ナデ	灰白	浅黄緑	2mm以下の灰白色粒と微細から2mmの透明光沢粒を少し含む。	口唇部に斜め目、15と同一個体の可能性あり
19	IIa南	弥生土器	壺	口縁部	—	—	円形浮文、横ナデ、ていねいな横ナデ	ていねいな横ナデ	赤褐	明赤	3mm以下の灰色系、2.5mm以下の茶褐色を少し、4mmと3mmの白色系粒、1.5mm以下の黒色の光沢粒をわずかに含む。	口唇に縦曲文、外面一部スス付着、内面一部炭化物付着
20	IIa南	弥生土器	壺	口縁	—	—	彫化、斜線が著しい	ていねいなボテ	にぶい黄緑	明赤	1mm～3mm大(1mm最多)の白色不透明の粒がみられる。	斜め目、炭痕前部に厚さ。胎土のつなぎ目がみられる。
21	IIa南	弥生土器	壺	胴部～底部	—	7.1	ナデ、摩耗	摩耗、指痕	(左)にぶい黄緑	にぶい黄緑	微細～4mm大(1mm最多)の赤褐色、白色不透明、灰白色の粒を含む。	
22	IIa南	弥生土器	壺	胴部～底部	—	1.45	彫化、荒いナデ	彫化、荒いナデ、指痕	にぶい黄緑	浅黄	微細～4mm大(2mm最多)の白色不透明、赤褐色、黒色光沢の粒を含む。	
23	IIa南	弥生土器	壺	口縁～胴部	—	—	横ナデ	工具軌跡に横方向のていねいなナデ	浅黄緑	浅黄緑	2mm以下の灰、茶褐色の粒、微細な透明光沢の粒を少し含む。	スス付着
24	IIa南	弥生土器	壺	口縁～胴部	17.1	—	横ナデ、数ナデ、ハケ目	縦で横、斜め方向のハケ目	明赤褐	赤	3mm以下の灰色の粒が少く、1mm以下の黒色粒、微細な白色粒を多く含む。	外面スス付着
25	IIa南	弥生土器	壺	口縁～胴部	—	—	斜方位のハケ目	横方向のナデ	にぶい黄緑	明赤	微細～1mm大の無色透明の微細粒、2.3mm大の白色不透明の粒を含む。	
26	IIa南	弥生土器	壺	口縁～胴部	—	—	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ	にぶい黄緑	灰黄緑	2mm大の赤褐色、白色不透明の砂粒がみられる。1mm大の黒色光沢の粒	スス付着
27	IIa南	弥生土器	壺	口縁部～胴部	—	—	ていねいな横ナデ、斜め目安帯、ナデ、指痕	指痕圧痕、横ナデ、ナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	5mm以下の茶褐色粒と微細な透明光沢の粒をわずかに含む。	外面はスス付着、内面炭化物付着
28	IIa南	弥生土器	壺	口縁部～胴部	—	—	ナデ、斜め目安帯	ナデ	浅黄	浅黄	微細な無色透明の微細粒、微細～2mm大の白色不透明、赤褐色の砂粒を含む。	
29	IIa南	弥生土器	壺	口縁	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	微細～1mm大の白色不透明な粒を含む。	斜め方向の斜め目、ナデ
30	IIa南	弥生土器	壺	口縁部～胴部	—	—	荒いハケメの後ミガキ、指痕	荒いナデ、指痕	(上)明赤褐	明赤褐	1mm～2mm大の白色不透明、無色透明の微細粒、1mm大の赤褐色で角のやが丸い粒を含む。	胎土のつなぎ目がみられる。スス付着
31	IIa南	弥生土器	壺	口縁～胴部	—	—	荒いナデ	ナデ	黄	黄	微細な無色光沢、無色透明の粒が含まれる。	スス付着、一部炭化物付着
32	IIa南	弥生土器	高坏	胴部	—	—	横ナデ	斜方位のハケ目	(左)明赤	(左)明赤	微細～3mm大の白色不透明、赤褐色の砂、特に1mmを多く含む。	炭化物付着
33	IIa南	弥生土器	高坏	底部	—	—	ナデ	縦状ミガキによるハケメの後、丁寧ナデ	浅黄緑	浅黄緑	無色光沢光沢/角柱状の粒を含む。	
34	IIa南	弥生土器	高坏	底部	—	—	回転横ナデ	横ナデ	灰	灰	微細な灰白色、黄褐色の粒を含む。	

第4表 大内原遺跡 石器観察表

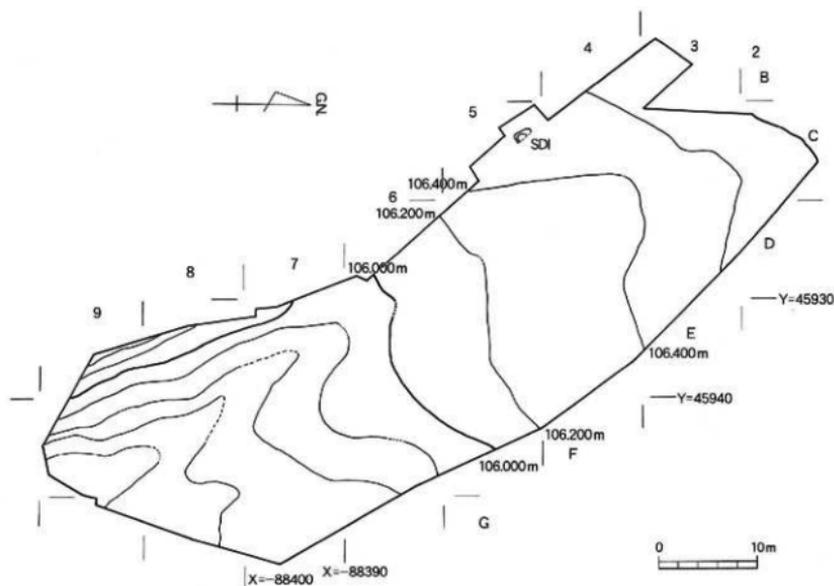
調査号	出土地点	原料	石材	最大径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
6	SA1	白石	尾納山酸性岩類	30.0	31.8	16.2	24000	

第5節 中世～近世の遺構と遺物

1 概要

本遺跡の中世の遺構として確認されたものは土壌1基である(第33図)。調査区内では柱穴(掘立柱建

物跡)は確認できなかった。遺構内出土遺物は、土師器小皿、墨書石である。調査区内からは、陶磁器、須恵器、砥石、火打ち石、石鍋が出土した。出土した砥石のなかで天草砥石は近世に属する可能性がある。



第33図 大内原遺跡 中世遺構配置図 (S=1/500)

2 1号土壌 (SD1)

調査区西側C5グリッドで検出された(第33図)。検出面(IIa層)からの深さは約70cmである。確認調査時に重機でK-Ah層上面まで除去中に土師器小皿3枚が出土したことで検出された。重機により土壌の北東側にあたる約3分の1ほどがアカホヤ上面まで破壊されてしまったが、平面規模は残存部分からの推定で1.6m×1.1m、形状は隅丸長方形と考えられる。底面は平らである。長軸方向はN-14°-Wを指すと思われる。

埋土は6層に分かれる。1層は黒色土で川原石を

含む層で径1mm程度のK-Ahを僅かに含む。2層は黒色土で径1mm～2cmのK-Ahを10%～20%含む。粘土質の粒もみられる。3層は黒色土で径1mm～5mmのK-Ahを含む。4層は黒色土で径1mm～6mmのK-Ahを約20%含む。径2mm～5mmの黒色粒も含む。5層は土師器小皿が出土した層で黒色土である。径1mm～5cmのK-Ahをまばらに含む。基本層序のIIb層の固まりもみられる。6層は径1mm～5cmのK-Ahを約20%含む。基本層序のIIb層の固まりもみられ、この層が一番しまっている。

遺物は5層より土師器小皿が5点出土した。確認

調査時に出土した3点(2点はほぼ完形)は重機によるK-Ah層上面までの除去中に出土したため、5層中から出土していることしか分かってない。本調査時に出土した3点(2点はほぼ完形)の土師器の小皿は5層中のほぼ同じ高さで口縁部を上にして出土した。なお、確認調査と本調査時に出土した土師器小皿片各1点が接合できたため計5点となる。また、1層には、当時土壌上部中央に積み上げられたと考えられる川原石が108個確認された。遺体の腐朽後、土壌内に落ち込んだと考えられる。楕円形で上下が平らなものが多く、長軸の径7cm~18cm、重量146.7g~1400gであった。その中で墨書石が3点確認された。3点とも石材はホルンフェルスである。微細な遺物を検出するため、フローテーション法による床付近の埋土の洗浄を実施したが、骨片・鉄釘等の遺物は確認できなかった。

土師器小皿38は完形で、口径8.5cm、底径は5.3cm、器高2.2cm。体部は内湾し口縁部が丸みを帯びている。底部は剥離が多くみられるがへら起しで、内外面とも回転ナデを施している。体部から底部にかけて黒変部分がある。

土師器小皿39はほぼ完形で、口径7.85cm、底径は6.8cm、器高1.8cm。底部はへら起しで、内外面とも回転ナデを施している。内面においては底部から体部にかけて境はそれほど明確でなく、内湾気味の体部と先細りの口縁部をもつ。底部が一部欠損しており、埋葬時に意図的に割られた可能性も考えられる。

土師器小皿40は確認調査と本調査時に出土した土師器小皿片各1点が接合したものである。推定口径8.05cm、底径は5.8cm、器高2.12cm。体部は内湾し口縁部が丸みを帯びている。底部はへら起しで内外面とも回転ナデを施している。体部から底部にかけて黒変部分が少しみられる。

土師器小皿41は完形で、口径8.25cm、底径は5.15cm、器高2.2cm。体部は内湾し口縁部が丸みを帯びている。底部はへら起しで内外面とも回転ナデを施している。体部から底部にかけて黒変が少しみられる。

土師器小皿42はほぼ完形で、口径7.95cm、底径は

6.1cm、器高1.7cm。底部は成形が荒くへら起しである。板目痕が残っている。内外面とも回転ナデを施している。内面においては底部から体部にかけて境はそれほど明確でなく肉厚で、内湾気味の体部と先細りの口縁部をもつ。

墨書石(籀石経)については、35には「仏説観無量寿経」の中間の一部分である「正宗分」の「定着」の「6 宝楼観」と「7 華座観」のそれぞれ一部が書かれてある。前後の箇所を書いたものは確認できなかった。なお、文字の風化が激しいが、「仏説観無量寿経」から引用すると次の部分である。□囲みは引用で明らかになったもの、◇囲みのは読めない文字である。本来は縦書きのものを横書きにしてある。

- ① 佛告阿難及摩竭國
- ② 觀若他觀者名為邪觀
- ③ 必生彼國作是觀者名為正◇
- ④ 希諦聽諦聞善思念
- ⑤ 佛當為汝分◇別解說除苦惱法
- ⑥ 汝等憶聞廣為大聞◇◇◇◇

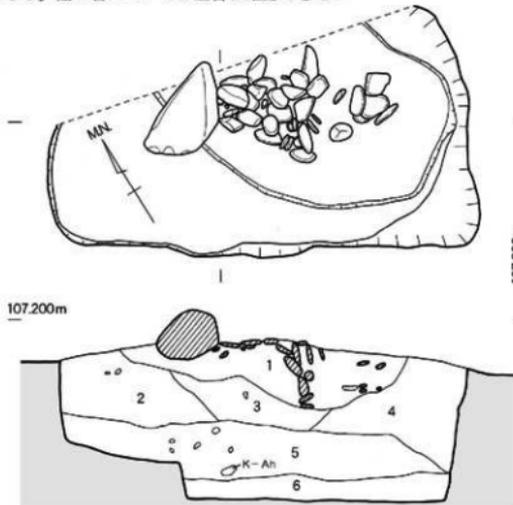
「仏説観無量寿経」から意味を抜粋すると、次のよう書かれてある。番号は引用の番号と一致する。

- ① 仏(ぶつ)、阿難(あなん) および韋提希(いだいけ)に告(つ)げたまはく、
- ② もし他観(たかん)するをば、名(な)づけて邪観(じゃかん)とすと。
- ③ かならずかの因(くに)に生(しょう)ず。この観(かん)をなすをば、名(な)づけて正観(しょうかん)とす。
- ④ あきらかに聴(き)け、あきらかに聴(き)け、よくこれを思念(しねん)せよ。
- ⑤ 仏(ぶつ)、まさになんぢがために苦惱(くのう)を除(ぞ)く法(ほう)を分別(ぶんべつ)し解説(げせつ)すべし。
- ⑥ なんぢら憶持(おくじ)して、広(ひろ)く大衆(だいしゆ)のために分別(ぶんべつ)し解説(げせつ)すべしと。

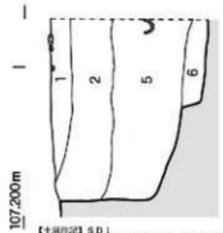
~(「大正新脩大藏経第12巻宝積部下涅槃部全」より引用)~

なお、側面の字は風化が激しく、仏説観無量寿経の前後の一部分であるかは不明である。36には、側面に「有五〇」、37にも側面に「舍利（無？）」と書かれてある。他の石については墨書は確認できなかった。

この土壌は埋土中から出土した土師器小皿と付近のIIa層より出土した東播系須恵器や磁器から13～14世紀の遺構と推測される。

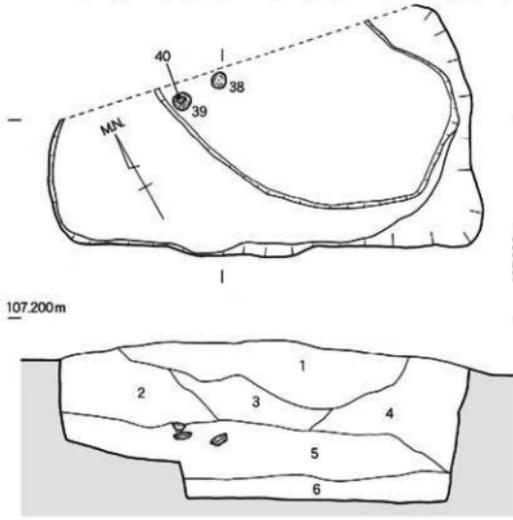
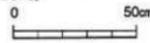


第34図 大内原遺跡 1号土壌 (SD1) 実測図 (S=1/20)

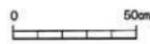
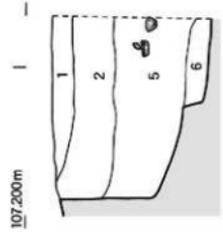


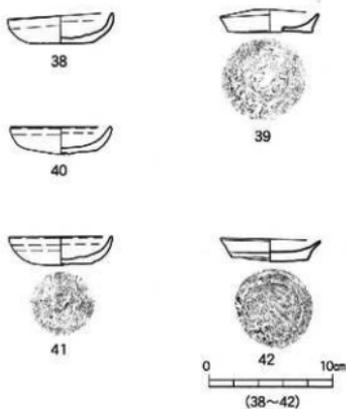
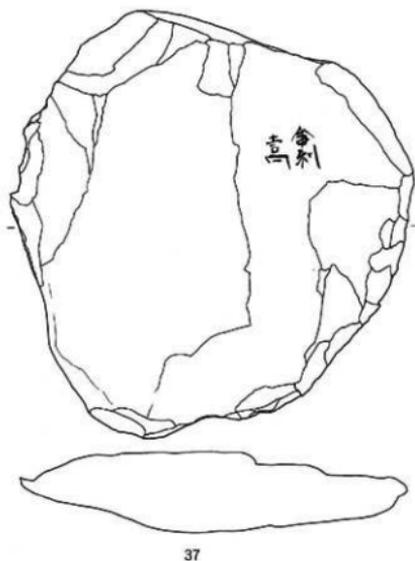
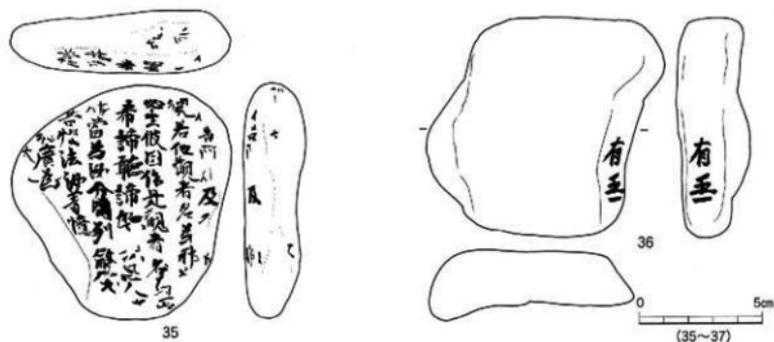
【土層記号 SD1】

- 1: 黒色土 (Glna) (S121/1) 厚1mmのK-Ahを弱含む含む。しまりは少なく、柔らかい。1mm程度の粒に含む。湿り気はなく、さらさらしている。摩滅の跡が認められる。
- 2: 灰色土 (Glna) (S121/1) K-Ahプロックを含む。厚1mm～1.5mmのK-Ahがこの層全体の10%～20%を占める。しまりがあり、つるつるしている。遺物の付着は少ない。
- 3: 灰色土 (Glna) (S121/1) 厚1mm～1.5mmのK-Ahを多く含む。厚2mm～3mmの風化の跡の付着が認められる。粘りはなく、バサバサした質感で、黒い土の粒は少ない。
- 4: 黒褐色土 (Glna) (S121/1) K-Ahプロックを含む。厚1mm～1.5mmのK-Ahがこの層全体の20%を占める。K-Ahを多量に含むため、粘りはあるが、サラサラしている。
- 5: 灰色土 (Glna) (S121/1) 厚1mm～1.5mmのK-Ahをまばらに含む。しまりがある。0.5mmの粒まわり (径1mm～2mm) を含む。遺物の付着は少ない。この層の下層で土師器が出土し、粘りはややあり、湿り気もややある。
- 6: 黒色土 (Glna) (S121/1) 厚1mm～1.5mmのK-Ahを多く含む。この層全体の約半分を占める。この層は一層も厚く、粘りがあり、つるつるしている。



第35図 大内原遺跡 1号土壌 (SD1) 土師器小皿の出土状況 (S=1/20)





第36図 大内原遺跡 1号土坑(SD1)出土遺物実測図(S=1/2,1/4)

3 調査区内遺物(第37図)

中世の遺物は、調査区西側で小片が出土している。青磁43は碗の体部にあたり、IIa層から出土している。外面には片切彫りで蓮弁文が施されている。青磁釉薬が内外面になめらかに厚くかかっている。釉色には濁りがあり、くすんだ感じとなっている。

る。14世紀頃の中国製と考えられる。

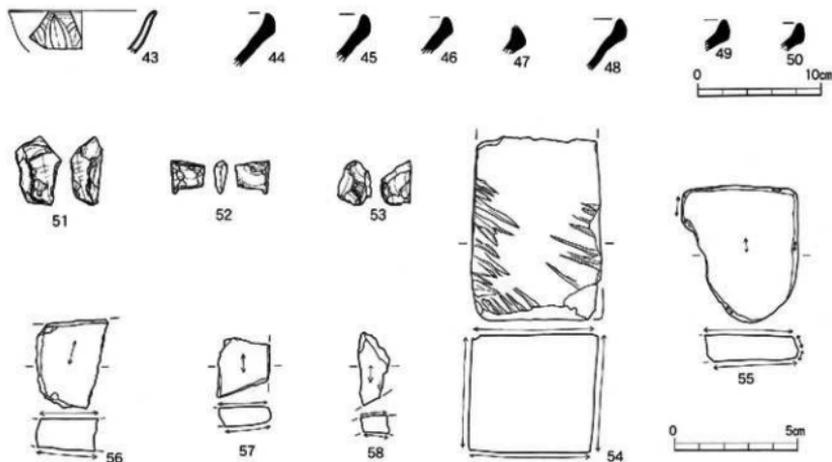
須恵器も調査区西側のIIa層から小片が7点出土した。44~50は東播磨型鉢の口縁部片である。これらの須恵器は口縁部の形態から13~14世紀と考えられる。

火打ち石は調査区内から3点出土している。51と53の稜線は摩耗している。52は火打ち石を打ち欠いた時にできた剥片である。中世の遺構と遺物が確認されていることから中世の遺物と判断した。51と52の石材はチャート、53は石英である。

砥石は5点出土している。砥石についても中世の遺構と遺物が確認されていることから、中世の遺物と判断した。54はIIa層から出土した。

石材は砂岩で天草砥石であるため近世の可能性もある。調査区内から出土した55～57は砂岩製である。55は上下二面が研磨用として使用されている。56・57は上下二面と片方の側面一面の計3面が研磨用として使用されている。直方体の整った形に成形してあったものが折れたものである。

58は調査区内から出土した滑石製の石鍋片である。



第37図 大内原遺跡 調査区内出土遺物実測図 (S=1/4,1/2)

第5表 大内原遺跡 中世出土遺物観察表

調査 番号	出土 地点	類別	器種	部位	法 量 (cm)			手法・原料・文様ほか		色 調		胎土の特徴	備 考
					口径	底径	高さ	外面	内面	外面	内面		
38	S01	土師器	小皿	丸形	8.5	5.15	2.2	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	2.5mm以下の赤褐色斑をわずかに含む。	ヘラ返し底、スス付着
39	S01	土師器	小皿	丸形	7.85	6.85	1.8	回転ナデ	回転ナデ	淡黄橙	淡黄橙	2mm以下の赤褐色斑をわずかに含む。	ヘラ返し底
40	S01	土師器	小皿	口径～ 底形	8.05	5.8	2.2	回転ナデ	回転ナデ	橙 (上)橙 (下)淡黄橙	黄	微細～1.5mm大の赤褐色の砂粒がみられる。	ヘラ返し底
41	S01	土師器	小皿	丸形	8.25	5.15	2.3	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	微細～2mm大の赤褐色の砂粒がみられる。	ヘラ返し底、スス付着
42	S01	土師器	小皿	丸形	7.95	6.1	1.7	回転ナデ	回転ナデ	淡橙 (上)橙 (下)淡黄橙	橙	微細～2mm大の赤褐色の砂粒がみられる。	ヘラ返し底、スス付着
43	IIa層	磁器	甕取鍋	口径～ 胴部	11.8	—	—	彫削、回転ナデ、 片切彫りの蓮弁文あり	彫削、回転ナデ	明緑灰	明緑灰	灰白	砂付面

44	IIa層	須恵器	埴鉢	口縁	—	—	—	回転機ナデ	横ナデ	黄灰	灰オリブ	微細～2mm大(微細最多)の白色不透明、無色透明な粒を含む。	実揚系
45	IIa層	須恵器	埴鉢	口縁	—	—	—	回転機ナデ	荒いナデ	灰	灰	微細～1mm大の白色不透明、無色透明の粒を含む。	実揚系
46	IIa層	須恵器	埴鉢	口縁	—	—	—	回転機ナデ	横ナデ	灰	灰	微細な灰白色の粒を多く含む。	実揚系、スス少量付着
47	IIa層	須恵器	埴鉢	胴部	—	—	—	自然焼、回転機ナデ	横ナデ	黒、黄灰	黄灰	微細～1mmの灰白色粒を多く含む。	実揚系
48	IIa層	須恵器	埴鉢	口縁～胴部	—	—	—	回転機ナデ	ナデ	黒黄灰、黄灰	黄灰	微細～2mmの乳白色粒、灰白色粒を多く含む。	実揚系
49	IIa層	須恵器	埴鉢	口縁	—	—	—	回転機ナデ	横ナデ	灰	灰	微細～3mm大(微細最多)の白色不透明、黄褐色の粒を含む。	実揚系
50	IIa層	須恵器	埴鉢	口縁	—	—	—	自然焼、回転機ナデ	横ナデ	(上)黒(下)灰	灰	微細な灰白色、白色不透明の粒を含む。	実揚系

第6表 大内原遺跡 中世～近世石器観察表

調査区	出土地点	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
35	SD1	磨石	ホルンフェルス	9.5	8.9	2.6	310.7	
36	SD1	磨石	ホルンフェルス	9.0	9.7	3.1	326.0	
37	SD1	磨石	ホルンフェルス	17.5	16.5	3.3	1139.0	
51	調査区	火打石	チャート	2.8	1.9	1.4	6.4	
52	調査区	火打石割片	チャート	1.4	1.4	0.5	1.1	
53	調査区	火打石	石英	1.8	1.4	1.2	2.9	
54	IIa層	礫石	流紋岩(天草礫石)	7.5	5.3	4.9	335.5	
55	調査区	礫石	砂岩	5.7	4.7	1.1	45.7	
56	調査区	礫石	砂岩	3.6	2.9	1.3	21.2	
57	調査区	礫石	砂岩	2.4	2.2	0.9	6.7	
58	調査区	石鱗片	滑石	3.0	1.3	0.8	4.5	

第6節 時期不明の遺構と遺物

1 1号溝状遺構 (SE1)

調査区の北西から南西付近にかけての第III層上面(アカホヤ上面)で溝状遺構を1条検出した(第38図)。検出面で最大幅2.3m、深さ6cm、長さ68mを測る溝である。幅は南西方向に向かうほど広がる。また、底のレベルから北西から南西に向かって流れていたと考えられる。土層断面の観察では2層に分かれ、1層は黒色土層で基本層序のIIb層と同一である(第39図)。2層は黒褐色土層で砂やバミスを多く含み、粘性がなく、しまりもない。2層の下位層は砂や礫が見られ、固くしまってる。この溝状遺構から遺物は出土していないため時期を決定するには

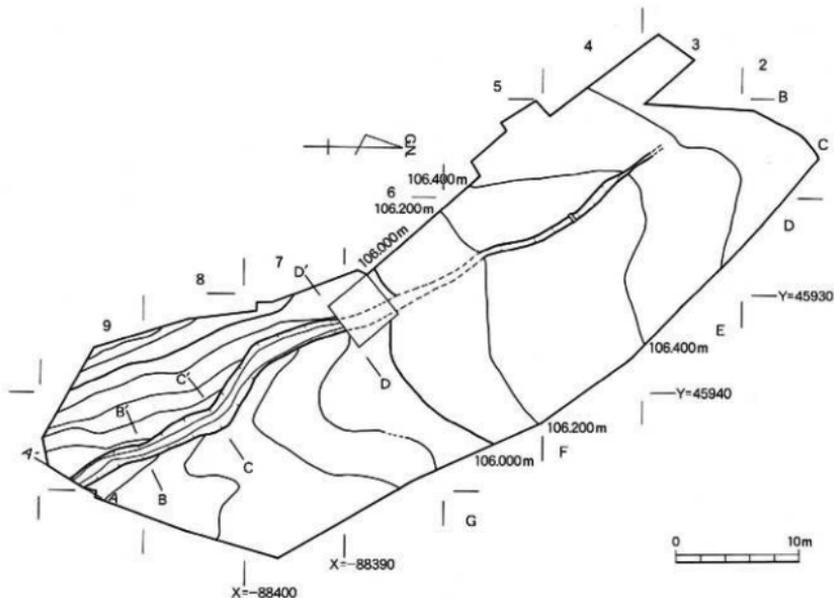
至らなかった。

2 石器 (第40図59～64)

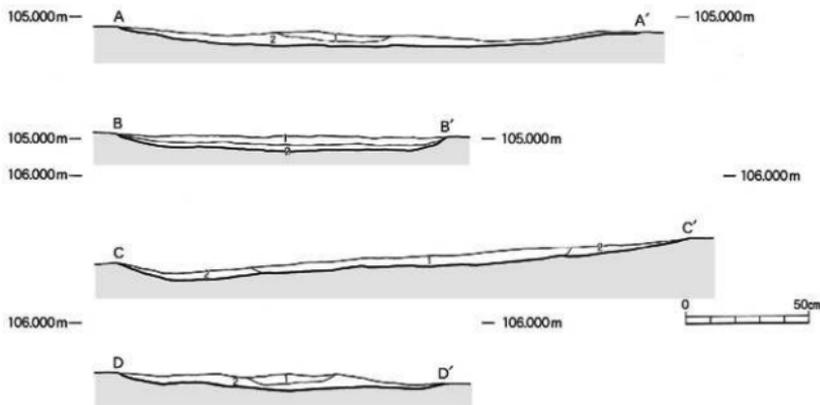
59・60は石核でどちらも石材はホルンフェルスである。61・62は尾鈴山酸性岩類で61は摩滅が一部にみられ62は磨石である。63は砂岩製の敲石である。64は頁岩製の石斧と思われる。60・61・63はIIa層中から出土していることから、弥生時代に属する可能性がある。59・62はI層中からの出土である。

3 陶磁器 (第40図65)

IIa層中から出土した65は白磁合子の身の部分で唐草模様が描かれている。



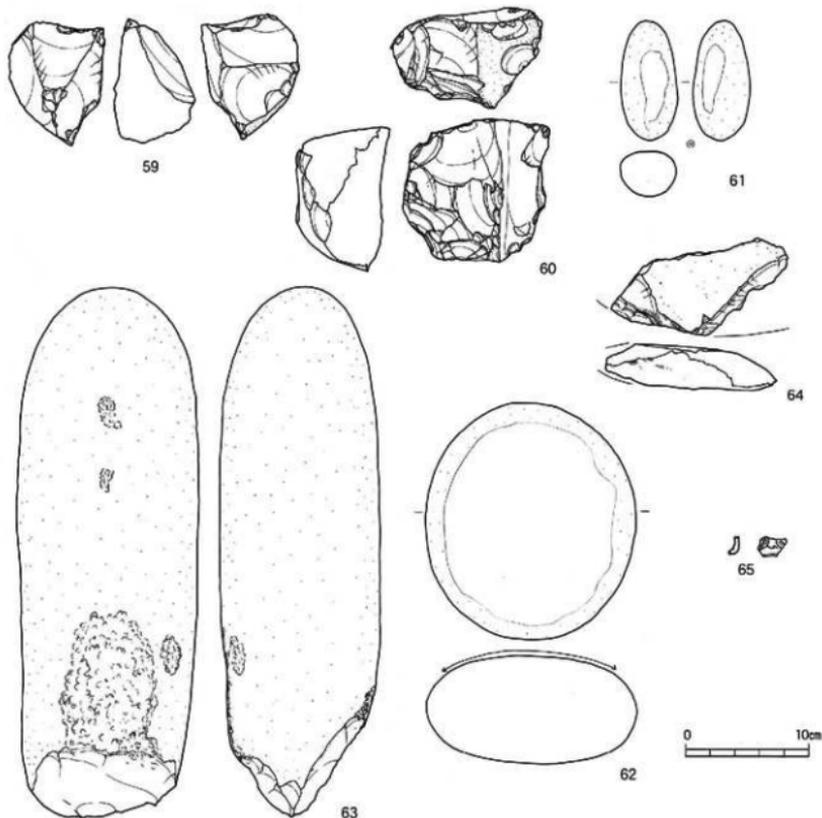
第38図 大内原遺跡 1号溝状遺構 (SE 1) 分布状況図 (S=1/500)



【土層構成】S.E.1

- 1: 赤土層 (赤土) (C) (Y2/D) 層。層の厚さを測りておかしらぬ。
- 2: 黒褐色土 (黒土) (Y2/D) 層。赤土層より多く含む。土はあまり分まらず、赤土で固まる土質を示す。乾燥はく、L.R.は無い。

第39図 大内原遺跡 1号溝状遺構 (SE 1) 土層断面図 (S=1/20)



第40図 大内原遺跡 時期不明の遺物実測図 (S=1/200)

第7表 大内原遺跡 石器観察表

図面番号	出土地点	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
59	I層	石核	ホルンフェルス	5.1	3.9	3.3	55.8	
60	IIa層	石核	ホルンフェルス	5.8	6.2	4.1	162.4	
61	IIa層	厚削ある鏃	尾跡山酸性岩類	4.9	2.3	1.9	23.6	
62	I層	磨石	尾跡山酸性岩類	9.7	8.6	4.5	551.1	
63	IIa層	磨石	砂岩	21.8	7.4	6.6	1863.7	
64	調査区	石片	頁岩	4.2	7.0	1.7	44.0	

第8表 大内原遺跡 遺物観察表

図面番号	出土地点	鑑別	器種	部位	法 量 (cm)		手法・調理・火痕ほか		色 調		胎土の特徴	備 考
					口徑	底径	外溝	内溝	外面	内面		
65	IIa層	磁器	合子	胴部	—	—	胎土、回転ナア	胎土、回転ナア	灰白	—	にぶい黄褐色	

第7節 自然科学分析の結果

1 目的

本遺跡の発掘調査で検出された1号土坑(SC1)では弥生土器が出土しているが、流れ込みの可能性がある。更に他の遺構との切り合いもないため、考古学的手法のみでは土坑の時期比定に決め手を欠いていた。しかしながら、今回土坑の床付近から炭化材を1点採取できたため、放射性炭素年代測定(AMS法)を行うことによって、土坑の時期を比定するための傍証を得ることができる。さらに、樹種同定が可能な比較的大きな炭化材も床付近から5点採取できたため、樹種同定により遺跡周辺の環境復元も行うことができる。

以上の情報を得るため、自然科学分析委託を実施した。以下、その結果を記す。

2 1号土坑における放射性炭素年代測定結果

(1) 試料と方法(第9表)

(2) 測定結果(第10表)

(3) 考察

加速器質量分析(AMS)法による放射性炭素年代測定の結果、 $2,180 \pm 40$ 年BP(1 σ の暦年代で紀元前360~290年、紀元前230~180年)の年代値が得られた。放射性炭素年代測定値よりも暦年代の年代幅がかなり大きくなっているが、これは該当時期の校正曲線が不安定なためである。

3 1号土坑における樹種同定結果

(1) 試料

試料は1号土坑から採取された炭化材5点である。

(2) 方法

試料を割折して新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柎目)、接線断面(板目)の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50~1,000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(3) 樹種同定結果

炭化物5点のうち4点がスダジイ、1点がアワブキ属と同定された。スダジイは、本州(福島県、新潟県佐渡以南)、四国、九州に分布する常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は腐朽、保存性や低く、建築、器具などに用いられる。アワブキ属は、本州、四国、九州に分布する落葉または常緑の小高木から高木である。

(4) 考察

スダジイは、西南日本に分布する照葉樹林の主要高木で、やや乾燥した台地や斜面に分布し、二次林の構成要素にもなる。アワブキ属は、山地に普通に生育する広葉樹である。いずれも温帯ないし温帯下部の暖温帯に分布する樹種であり、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

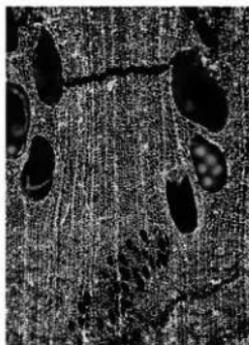
試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
No.1	SC1床面	炭化材	酸-7%リ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析(AMS)法

第9表 大内原遺跡 1号土坑(SC1)における放射性炭素年代測定の試料と方法

試料名	測定No. (Beta-)	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代(西暦)
No.1	207,149	$2,190 \pm 40$	-25.4	$2,180 \pm 40$	交点: cal BC 200 1 σ : cal BC 360~290, 230~180 2 σ : cal BC 370~110

第10表 大内原遺跡 1号土坑(SC1)における放射性炭素年代測定結果

大内原遺跡の炭化材



横断面 ————— : 0.4mm

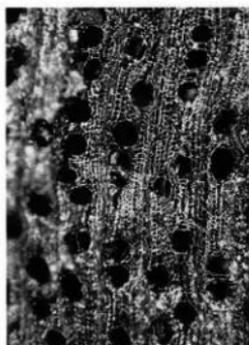


放射断面 ————— : 0.4mm

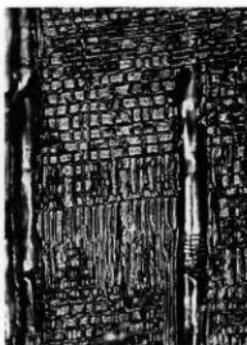


接線断面 ————— : 0.2mm

1. No.2 スダジイ



横断面 ————— : 0.4mm



放射断面 ————— : 0.4mm



接線断面 ————— : 0.4mm

2. No.5 アラブキ属

第8節 まとめ

本遺跡においては、弥生時代・古墳時代・中世の遺構・遺物が確認された。以下、各時期における遺構・遺物の概略をまとめ、調査報告の概括としたい。

1 弥生時代の遺構について

竪穴住居跡1軒(SA1)及び土坑1基(SC1)が検出された。

竪穴住居跡については推定床面積が17.2㎡と当時の方形プランの竪穴住居跡としては標準的である。その周辺からは遺構・遺物は確認できなかった。出土した高坏と壺から弥生時代終末～古墳時代初期のものと考えられる。周辺遺跡では赤石・天神本第1遺跡、中ノ迫第1遺跡(二次調査)で弥生時代後期の竪穴住居跡が各1軒づつ検出されている。なお、時期比定については、松永幸寿氏による編年案を参考にした。

土坑については、出土遺物や自然科学分析結果から弥生時代中期後半の遺構の可能性が高い。炭化材は、丸太状のものばかりで板状のものは確認できなかった。現段階ではその性格については特定するに至っていない。

2 弥生時代・古墳時代の遺物について

I層・IIa層から出土した。その器形は壺・甕・高坏である。そのほとんどが細片で北西部で多く出土していることから、本遺跡北西側に隣接するならかな斜面・畑や南側に隣接する中ノ迫第1遺跡(比高差約13m)から流れ込んだものと考えられる。中ノ迫第1遺跡からは弥生時代後期に属する土器片が多く出土している。本遺跡の北側に位置する天神本第2遺跡からも弥生時代中～後期に属する土器片が出土している。時期については突帯や口縁部・口唇部の特徴から、弥生時代中期～後期のものと考えられる。本遺跡から出土した長頸壺と文様の似た長頸壺が赤坂遺跡からも出土している。遺物の出土状況から、調査区北西側の台地からの流れ込みと考えられる。

古墳時代の遺物は須恵器の坏蓋が1点確認された。6世紀後半から7世紀初めのものと思われる。

3 中世の遺構について

検出された土壌1基からは礫石径が3点確認されているが、これらは供養のための埋経の一例であると思われる。礫石径は県内では20例ほど知られている。宮崎学園都市遺跡群の3例と天神河内第1遺跡の1例を除けば他は一字一石径であり、本遺跡の遺物は県内でも希な例として注目すべきものである。時期については床面からやや浮いた状態で出土した土師器小皿の特徴と付近のIIa層より出土した東播系須恵器や磁器から考えると13～14世紀の遺構と推測される。周辺遺跡では前ノ田村上第1遺跡・銀座第1遺跡・湯牟田遺跡から中世の土壌が検出されている。

4 中世の遺物について

土壌から出土した土師器小皿の他に、東播系須恵器・中国製磁器・火打ち石・石鍋片が出土している。東播系須恵器については13～14世紀、中国製磁器は龍泉窯系青磁蓮弁文碗の小片で14世紀と考えられる。火打ち石・石鍋片については東播系須恵器等の中世の遺物が出土していることから中世のものとして推測される。出土した遺物からも調査区外に掘立柱建物跡がある可能性が高い。

以上、簡単にまとめを述べてきたが、今回の調査では特に弥生時代と中世の遺構・遺物が豊富に確認された。残された課題も多いが、調査区周辺にも竪穴住居跡や掘立柱建物跡がある可能性が高い。

【引用・参考文献】

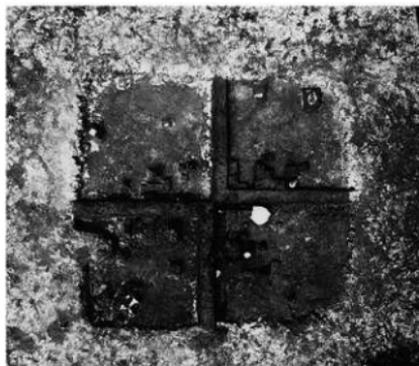
- 松永幸寿2004「日向における古式土師器の成立と展開—宮崎平野部を中心として—」 研究代表者 下條信行
- 宮崎県埋蔵文化財センター2001「木座遺跡」第58集
- 宮崎県埋蔵文化財センター2005「竹瀬C遺跡」第96集
- 宮崎県埋蔵文化財センター2005「山口遺跡第2地点」第99集
- 宮崎県埋蔵文化財センター2005「唐木戸第2遺跡」第100集
- 宮崎県埋蔵文化財センター2005「前ノ田村上第1遺跡」第116集
- 宮崎県埋蔵文化財センター2005「崩戸遺跡」第103集
- 宮崎県教育委員会「天神河内第1遺跡」
- 宮崎県教育委員会「学瀬遺跡・八見遺跡」
- 宮崎県教育委員会「下別府一字一石経塚」
- 宮崎県教育委員会「山内石塔群」
- 長谷部栄留・今井敏1995「日本出土の中国陶磁」
平凡社版
- 「原色岩石図鑑」保育社
- 「世界陶磁器全集3」小学館
- 「考古資料大観3」小学館



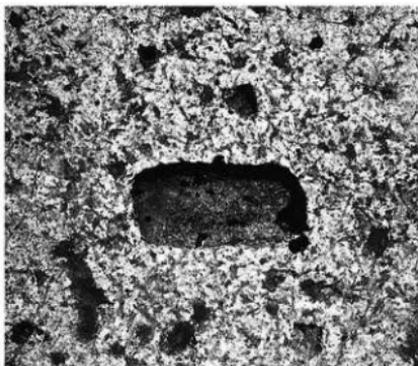
①大内原遺跡遠景（上空北より）



②大内原遺跡全景



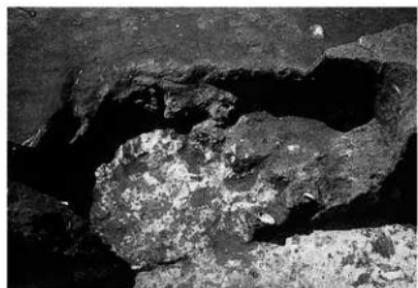
①1号竖穴住居跡 (SA1)



②1号土坑 (SC1)



③1号土坑 (SD1) 川原石出土状況



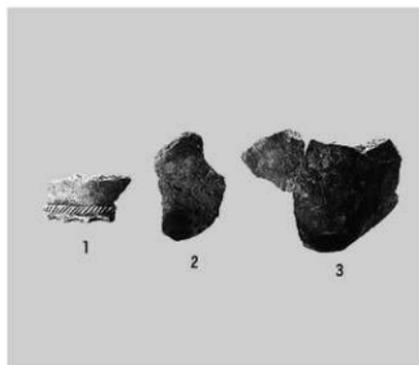
④1号土坑 (SD1) 土師器小皿出土状況



⑤1号溝状遺構 (SE1)



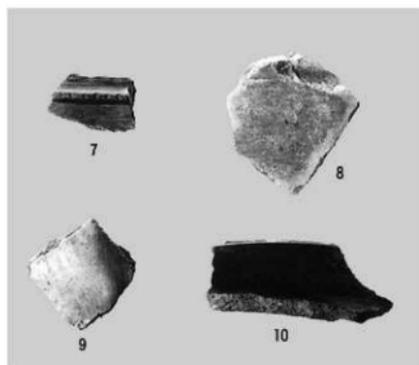
⑥調査区北東部遺物出土状況



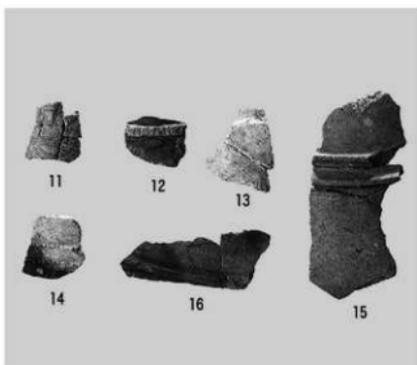
①弥生土器（確認調査B区出土）



②1号竪穴住居跡出土遺物



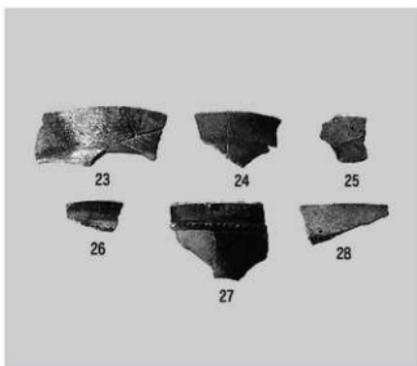
③1号土坑出土遺物



④遺構外出土弥生土器（1）



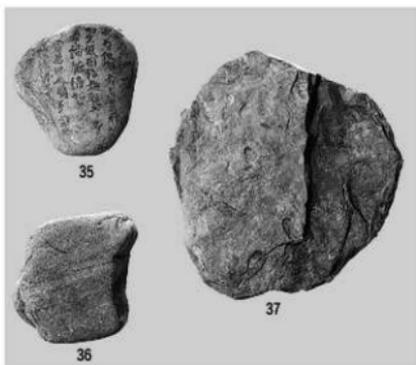
⑤遺構外出土弥生土器（2）



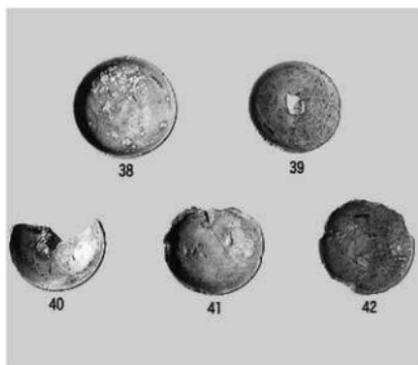
⑥遺構外出土弥生土器（3）



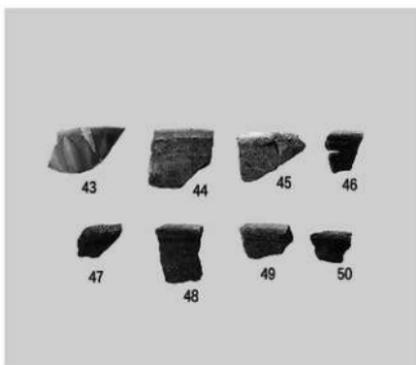
①遺構外出土弥生土器 (4)



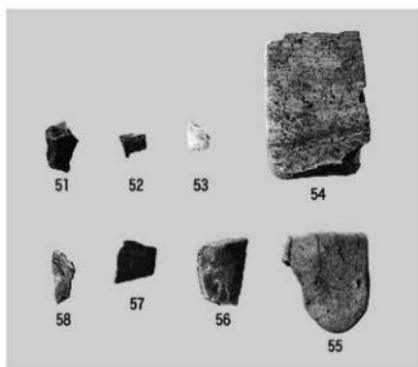
②1号土墳出土遺物 (1)



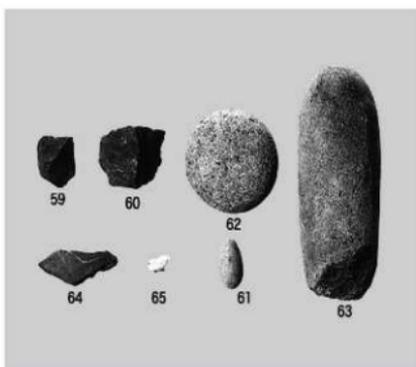
③1号土墳出土遺物 (2)



④遺構外出土中世遺物 (1)



⑤遺構外出土中世遺物 (2)



⑥遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	てんじんもとだいにいせき		おおうちばるいせき					
書名	天神本第2遺跡		大内原遺跡					
副書名	東九州自動車道(都農～西都間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書28							
巻次	1							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第123集							
執筆・編集担当者	吉本正典・白地 浩							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地 TEL. 0985-36-1171							
発行年月日	2006年3月10日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
天神本第2 遺跡	宮崎県児湯 郡川南町 大字川南字 北原	45405		32° 12' 13"	131° 29' 14"	2004.7.12 ～ 2004.9.17	660㎡	東九州自動車道(都農～西都間)建設に伴う発掘調査
大内原遺跡	上に同じ	45405		32° 12' 02"	131° 30' 00"	2004.11.8 ～ 2005.3.30	3,300㎡	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
天神本第2 遺跡	集落	旧石器時代 縄文時代 弥生時代	集石遺構2基 小穴1基	細石刃核 押型文土器・剥片・砕片 弥生土器				
大内原遺跡	散布地 集落	弥生 古墳 中世	竪穴住居1軒 土坑1基 土壇1基	弥生土器・石器 須恵器 墨書石・土師器・須恵器・ 石器・陶磁器・石鍋片				

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第123集

天神本第2遺跡
大内原遺跡

東九州自動車道（郡農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書28

2006年3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地

TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印刷 株式会社ヒダカ印刷

〒880-0862 宮崎市潮見町13-5

TEL0985(28)4113
